

り、今や魔の大王は大魔力を揮つて、天地も微塵になれと大破壊の真最中……

「町さ行きなつて、仕方ねえでねえか？」と粉屋は悄然となる。

揺ぶられ、小衝上げられ、雷光には眼を瞑り、雷鳴には縮み上つて十字を切る中に、粉屋は身を細うして蹲つたまふ、いつしか昏々となつたのである。

六

「何處へ往ぐべえ？ 誰が家さ往ぐべえ？」

と考へく／＼停車場を出て町二ツばかり越したが、誰にも面を合せたくなく、何も彼も厭になつて了つたので、まづトあるホテルへ行つて、キャベツの鹽漬で、茶を啜つて、さて窓から戸外を覗いて見ると、雨が降つてゐる。

大雨で、物の三時間も降通してゐた其間、粉屋は深く思ひ沈んで茫然としてゐたが、遂に吾家へ戻ることに決心して、停車場へ引返して見ると、發車の後、據な

いからプラットホームに踞むで四下を顧視してゐると、機關車の附替やら、線路替やらで、列車が往つ戻りつする。油差、荷物方、乃至列車の組立方などいふ、側へ寄ると芬と悪臭を放つ小汚ない連中が忙しさに立働き、着く列車があれば、出る列車があつて、停車場は上を下へと混雑するが、粉屋にはそれからもう藥袋もない馬鹿氣切つた事のやうに思はれ、時節さへ來れば死ぬものを、何しに人は醒醒して、かばかり汽車の發着することか、明日さへ知れぬ露の命なら、人は只樂々と打寛いてあるべきにと、思へば、堪らなくなる程その打寛いてありたくて、心配もなく、屈託もなく、うツとりと夢から夢の底へ潜つてゐたい、ゐたいと、心は唯浮の空に憧れ行く時、彼は衝と起つて停車場を出た。何やら心の底で蠢動する、蠢動するのは能く分るから、平生の調子で居られぬけれど、さて何が蠢動つくとも分らぬので、そればかりに氣を取られて、惘々と放心したやうになつて行く。

町は森閑として薄暗い。忘れたのやら、街燈は未だ點ぜられぬのに、月は既う空

に在つて、雲の行くこと急にして、家々の壁やら往來やら、時々翳つては又明るくなる。未だ濕氣の去らぬ空気が蒸暑く、何處やらに青菜の匂ひを持つて、地気が氤氳と立ち、町は町の氣の重くなるほどの臭氣がある。風は公園を吹通つて、さやさやと木の葉のかすめた友摩の音や、月を遮る村雲の影で、四下の物が一體に鬱々と暗愁の底に沈み、長細い人氣の罕な町がいとゞ物淋びて見える時、何處を行く馬車の響か、忽ちがたくと心なく寂寞を破る。粉屋は背後で手を組んで徐かに足を運び、物を思うでもなく、思はぬでもなく、何を感じるでもなく、感ぜぬでもない、取留めぬ氣になつて、悄然とはしながら、うつゝに夢路を辿り行くと、

忽ち何處からともなく笛やら喇叭やら吹物ばかりを合奏する音が通ひ來て、繕れつ縫れつ妙に紛糾つた呂律の、流石に調は成しながらも、思ひ切つたる亂調子、嘯と響き來るのを聞けば、それはウォルツで、中にも喘ぐが如き切なさうな一の音色の、餘の音色とは隔れぬに、衆を壓して獨り中空へ挺出でんとするのがあつたが、

之を聞くと宛然何が大きなもの、堂々としたものが、二度三度躍上つて、自由の天地へ脱出しようと藻掻くけれど、如何しても脱出し得ぬといつた趣がある。

「入つて見べえかな？」と粉屋の躊躇つたのは公園の入口。門は開放しの、中には街燈二基の光が、燦として四下を照してゐる。

門内は明石屋の並木道が奥深く通つて、末は何處へ通ずるとも知ぬ。入らうか、入るまいかと、迷つてゐる中に、粉屋の足はいつしか園内へ踏入つて、その明石屋の並木道を辿りつゝも、兩側を顧ると、針金で吊した角燈が風にゆらついて、茶褐色の地面を赤くも青くも照し出してゐる。並木道が急に右に折れた處に樂堂が有つて、陸軍の樂隊が今しも奏樂の最中、堂下の棄ベンチ幾脚かには、薄闇い人影も微見えるけれど、今は如何にも人中に交る氣になれぬので、粉屋はトある道端のベンチに腰を卸した。

さら／＼と木の葉に風が通つて、空は雨雲の走ること頻に、次第々々に露れて行

く時、女の影がふと前を通る。粉屋が何の氣なしに其後姿を目送ると、其女は立ち戻つて来て又前を通り過る。此古狐めがと腹の中で罵る側へ、女は衝と寄つて、同じベンチに竝んで腰を掛けながら熱と此方を視る。油断のない黒味勝の眼、紅い唇、美しく徹つた鼻筋、これらが眼前に隠現とした時、粉屋は小難かしい面をして苦々しさうに、えい小蒼蠅いと、ツイと餘所を向いて了ふと、

「旦那、お一人でお淋しさうね」と隣の女が話掛ける。

「さうさね……」と不用意言ひかけて、偶然氣が附いたから、慳貪に「駄目だよ

……人柄見て物を言ふが好えだ……さア、去がツしやい……」

女はほくと竊笑をして、

「まア、可怖いことね！ 誰も取つて食べようと言やアしませんよ。そんなに心配しなくツても好いわ。たゞね、私も一人で淋しいもんだから、一寸お愛想を言つたばかしさアね……」

粉屋は黙つつ了つた。大方起つて餘所へ行くだらうと思の外、女は一寸欠びをして、矢張り竝んで腰を掛けてゐる。横目で窺と視ると、まだうら若くてなか／＼の美人だ。双方とも默然でゐる。音楽は一しきり止んで更に又始まつたが、今度のはしんみりとしたもので、前の程は騒々しくくない。

「淋しいんだら何故何時までも此處に居るだね？」と粉屋が言ふ氣もなくツイ口を滑らせるると、女は振向きもせずして、

「貴郎は町の人ぢやないのね？」

「己近在の者だア……まんだ行く先も極まんねえで、かうして……」

「あら、極まつてるわ、どうせ旅宿へ行つて寝ツ了ふんでせう？ でなきや屹度飲屋だわ。」

「何で己が其様した所へ……」と一寸口を噤んで、更に出直して、「己一人で飲屋さ
行きたとつて、何の面白え事あるべえ……」

ふさぎの蟲

「あら、お伴は幾らだつて出来るわ、貴郎。」

「だつて往來で伴を拾つても往がれねえでねえかね？」

「まア飲屋へ行つて御覽なさい、幾人だつて出来るから。」

「そりや然うだけんど……」

腹の中で、

「ほんに己飲屋さ行きて見べえかな？ 此女子引張つて行くだ……ほんに面白え

かも知んねえ……」

と咄嗟の間に決心して、

「お前己と一所に行がねえか？」

女は何とやら躊躇氣味で、溢りく、

「住つても好うござんすけどね……私し……アノ……待合せてる人が有るんだから」

「誰を待合せてるだ？」

「あの、職人の人……」

「そんな者だら如何でも好えでねえか？ 打棄といて、己と一緒に歩べえ……」

何でも彼でも一番底抜け騒ぎをやらすには止まぬ氣になつた。

「ぢや行ませうか……途中で逢ふかも知れないから。」

「逢はねえでも好え、そんな者にや用ねえだ」と粉屋はベンチを起上つて、「さア、

往ぐべえ！」

女も衝と起つて、スラリとして風の好い白頭巾で頭を包んだのが、踵迄隠れる袖無しを着た、丈低く横太りの粉屋と竝んで歩き出す。

「如何しても今夜逢はないと、不好んだがねえ……」と女は言つて了つてから、何と思つたか、言譯らしく、「不具なのよ、其人は。兩方とも腕が無くツてね……」

「如何してだ？」

「機械に介まつて腕つ了つたんですツさ。」

ふさぎの蟲

「そんな者に何故然う逢ひてえだ？」

と少し稀有に思ふ。

「だつて、歌が大變旨いわ。」

「そんで如何したッ？」

「私しね、今日、實ン所は、一所に川向うの森へ行く積りだつたの。」

「さうだつたか……」と冷笑して「だから、己と一所に行くな迷惑だか？」

「あら、さうぢやないンですけどさ」とばかりで後を言はぬ。

公園を出てから、女に行先を相談して、辻馬車を呼んで之に飛乗る。此處らは、兩側町の凸凹道で、馬車は踊りく喧ましい音を立て、行く。未だ背の口の事とて家々の窓から、火影が漏れ、内には話聲も聞える。行きくつて花園を過ぎて、小さくいけれど白壁作りの家の側を通る時、家の内に男の太い聲で哄然と笑ふ聲がして、續いて女の甲高な、さも打解けたらしい笑聲も聞える。

粉屋は之を聞きつけて、腹の中で、

「人は皆此通りだ、七面倒臭え理窟なんぞ捻つてる奴は一人だつて無え、皆面白ろをかしく世を送つてるだ……」

と思ふと我ながら我腑甲斐なさに腹立たしくなる。少し黙然としてから、

「だら、其男は腕が無えだね？」

と女に問懸けた。

女は片手で馬車の母衣に掴まり、片手を粉屋の膝に置いて、びつたり寄添つたまま、

「ミシヤさん？ はア腕無しよ。」

「さうだか。一體ミシヤさんツていふな何だ？ 汝の情夫だかや？」

「あら、厭だ、馬鹿にしてなくツてねえ。ミシヤさんはお老爺さんだわ、貴郎、病人よ。家とは舊い知己で、私しの赤ン坊の時能く抱こしてお守りをして呉れた人だ

わ。

「何だ、馬鹿々々しい！ だら、汝の親父は何だ？」

「ペンキ屋よ。」

「まんだ達者であるだか？」

「いゝえ、虎列刺で死んだつたの……もう直き其處よ、飲屋は……」

「さうだか……汝こんな商賣始める前は何爲とつた？」

と根を搦つて見る。話をしていると、何となく気が紛れて好い。

「私し賃仕事してゐたの……馬車屋さん彼處の家へ着けてお呉んな。」

七

數分の後には、居酒屋の店の隅に、粉屋は女と相對つて椅子に凭つてゐた。此の家は小汚なくて、狭くるしくて、悪臭い匂ひがする。店の真中の卓子には辻馬車の

御者共が酔しれて悪騒ぎをして居、風呂草や瓢箪草の植木鉢を駢べた窓寄りには、怪し氣な風體の男が二人茶を喫んでゐたが、一人は端の曲つた段鼻の禿頭で、頻に咳をし、一人は頭髮の黒い、兵隊髯の男で、自分のコップの中を覗きながら、何やら訝えぬ面色して、前齒で口笛を吹いてゐた。尙ほ店の隅の煉瓦のストープの側には、白髮頭の小作りの老爺が口癖に南無まみだが出さうな勢の脱けた面色をして、惘々と眼を細くしてゐた。其他にも尙だ三四人の客が煤けた店の彼處此處に散らばつてゐたが、いづれも皆隣近所には懸構ひのない面色で、平氣なものである。

粉屋の陣取つたのは、別間の小座敷へ通ふ戸口寄りの薄闇い隅の處で、此處からは壁ランプ五ツに照された店中が能く見渡される。卓子は窓際に据ゑてあつたが、窓は開放して、戸外からは種々の物の匂ひを孕んだ、歌に生温い風が絶えず吹入る。

「汝が名何と言うだ？」

「私し？ アンナ。」

「だら、アンナよ、相識の盃しべえ。」

と前のウオットカの鱈を取つて、二ツの小盃になみくくと注ぎ、押付ツこをやつて、グット仰つた。アンナは頭巾を脱つたが、かうした所を見ると、又一段と美しい。赤毛の濃い髪は浪の如くうねりを打つて、栗色の切長の眼の底には生々した光を湛へ、見るからにきびくした女であるが、白いふつくりとした指先で、短かい上衣の胸の飾り髪積を弄りつゝ、目を細めたり開けたりしてゐる。

熟々其様子を視てゐる中に、これに舞踏をやらせて、かう身體を斜にト、トンと前へ出る拍子に、肩を一揺り揺つて秋波を遣はせたら、嚙好からうと思つたので、
「汝舞踏出来るだか？」

「どうか斯うかね」と又酒を注ぐ。

「酒もいけるだね」と冷笑すると、

「そりやアね、どうせ此様な稼業してゐるんですもの、飲まずにや居られないわ、貴

郎」と平氣なもの。

「そんなえ商賣が辛えだかね？」と此方は益々茶にして懸つて、強ち其を隠さうともせぬ。

女は急には返答をしなかつた。先づ眉を揺つて、鬢のほつれを撫上げ、黒麵包の端を缺いて、如何にも酒客らしい生意氣な風をして、其をば一寸歟いだから、口へ入れ、不味さうにニチャク食りながら、

「男だつても然うでせう？ 何ほ女好だからつて、誰彼の見さかひなしに女をお客に取らされて、御機嫌取れと言はれたら、屹度厭になるわ。私し達だつて厭な事矢張し厭だけど、でも喰すにや居られませんか。それに男の人には貴方の前ですけど、好い男ツていふもな澤山は無いものね。お客ツてツたら十人が十人皆見ると胸が悪くなるやうな人ばツかしだわ。よしんばお客は皆様子の好い人ばツかしだつても、どうせ碌な稼業ぢやなし……何ほ私し達が厚かましいたつて、これでも人間で

すもの、恥かしいツて事知つてますから、時々酔が醒めると、世の中が厭アになつて、寧ろ首でも縊つて死んぢまひたくなる事も有るンですよ。其様な時にや、仕方が無いから、ウオットカの半鱈も引つけて酔で紛らしツつて、而しちや段段深味へ陥つて行くンですのさ……酔ひでもしなきや此様な稼業に出られますかつて、貴郎？……何ほ何だつて厭ンなつ了うわ……」

この顔を忘れてはならぬとやうに、直と粉屋の顔を目守めた女の眼の底には、例の先を湛へてゐた。粉屋は此話の初めから其眼の胸に喰入るが如き想を爲してゐたのであるが、皆見ると胸が悪くなるやうな人ばツかしと云つて思入れをされた時には、流石に忘々しかつた。剩さへ是でも人間だから如何仕つたの、斯う仕たのとそんな文句を聴かうとて伴れて來たのではないと思ふと、粉屋は散ち怒氣心頭に發して、倍となり、

「どんねえ辛えとつて、運だら仕方ねえでねえか？ 己何もそんなえした眞面自な

話聴くべえとつて汝を此處へ伴れて來たでねえ、鬱を晴らすべえとつて伴れて來た。そんなえした話聴きたくねえ。己思ふさま、顛覆へる程の底脱け騒ぎやりてえだから、さう思つて貰ふべえ。十兩掛つたとつて、二十兩掛つたとつて、金に絲目を付けるンでねえ。たんだ命の洗濯してえだ、クワツとやりてえだ。汝に任せるだから、好えやうに扱つて呉んろ。さア、躑躅しすと、取ツ掛れえ！ 汝にや三兩が禮を與るべえ。其代クワツとやるだぞよ！」

と忽ち眼中に凄い光を持つて、手を領へ掛けて、首を掉り眼を瞑むる。

女もグツと了解んで、これも忽ちクワツと花の開いたやうになつた。此時迄は此客は厭にくすんだ客だ、此様に髻だらけの道理らしい面をしてゐて、大方家には女房子も有らう、遊ぶと言つても高が知れてゐると見括つてゐたのが、今のタンカの切りやうでは、随分羽を伸してやると見て取つたので、爛と眼の中を光らせて起上り、頭巾を執つて頭へ投掛けながら、

「初手から然うお言ひなさりや好いのに。何だかこつ捻んなさるもんだから、分らなかつたわ。ぢや直き行つて来るから、待つて、頂戴よ。ハーモニカの旨い人を連れて来るから、而して意いきを伺がつたり伺がはせたり、踊つたり、跳たりさ。ほ、ほ、好いわ……私しが行つて来る中に、貴郎彼方のお座敷へ（と隣座敷を指して）引越しといて下さいな。ね、好いでせう？ それから、お茶とウオットカをさう言つてね、何かお殺も序に……どら、行懸の駄賃に、もう一杯グイ飲みやらかさうか。」と、ウオットカを一杯引掛けて、嬌然して、何處ともなく出て行つた。

八

粉屋は店番を呼んで、誂物をして置いて隣室へ遷つた。此處は廊下めく長細い煤けた小座敷で、往來に向いて三處に窓が明けてある。其窓と窓との間の壁に、額が二面掛けてあるが、一面は熊狩りの圖で、今一面は裸體美人の像。それをば粉屋は

一目見渡したまゝで、圓卓子に對つて幅廣の皮張りソファに腰を卸したが、このソファの上にも額が一面ある。畫面は草のむやみに生ひ茂つた野原の景のやうでもあり、亦靜かな日の海の景のやうでもある。中央に茶褐色の染のやうなものがあるが、これは見る者の都合次第、薬屋としても好し、船にして置いてても差支へない。其額の左右の壁にランプが一個づゝ取付けてある。店は益々客が立込んで騒々しく、コツプが鳴る、罎の栓を抜く音がボン／＼する。

「今夜は命の洗濯しるだ……」と粉屋は考へ／＼ウオットカを注いで、グツと仰飲る。洗濯したゞら、蘇生るかも知んねえだ。もう好えころ怠けたア。怠けたとつて物事の理窟ウ分るもんだら、これ、へえ、仔細ねえけど己にや理窟ウがら分んねえだもん。氣イ減入るけれど、何故氣イ減入るだか、分んねえ、唯もう厭な氣持になるばかりだア。そりや、成程人といふもんはおツ死ぬもんだ。だけんど、生きてるからおツ死ぬだから、おツ死ぬに、これ、何の不思議もねえ。己も押付けおツ死

ぬべえさ……魂の事忘れてはなんねえ——そりや然うだッべえ。だけれんど魂を一體如何したッら好えだか、そいつが己にや分んねえたから、はア、不好だア！」

粉挽のクジカの事が憶ひ出される。

「彼奴は思ふ存分一杯に世を送つて、人が何と言はうと構んねえだ、何の屈託もねえだ。だけれんど、彼奴も人間だら、魂の無えッていふ理窟ウねえ。先生だとして然うだ。魂は有るけれど、人々に由つて今日の送り方が違うだ。今の娘としたとして、こんな事して生きてるな小愧かしいと言ふ。分んねえでねえか、何故小愧かしい？ 因縁づくで此様した世を送るもんだら、何も、これ、小愧かしい理窟ウねえでねえか？」

とかう思ふ時、何やら遠い〜處から模糊と心に射す影があつて、濕ッほい重たい氣になる。

吻と溜息をして、又酒を仰飲つて、ソファの脊に凭れかゝつたなり、熟々と考へ

込む。

何故とは知らず先刻がた公園で見た軍樂隊の大喇叭が眼の前に浮く。

ブウ〜と鳴つて、餘の音色の仲間を逸れんと藻掻く。續いて辻馬車が鬱いだやうな夜の寂寞を破つて、心なくがたく〜と轟いた音を、今聞くやうに憶出す。

「人間は水車と同じ事だ、日がな一日種々な事に撞着つてよ、そりよ心で碎して齧齧して居るだもん。我が心に我がの分りようが無えでねえか？」

と目に見えぬ誰やらに喰つて懸る。

「そりや物事の理窟ウ了解んでる衆だら、仔細なかつべえけれど、己達のやうな者に何として、其理窟が分るべえ。己達は、これ、浮世の重荷に挫折けた人間だア、世の中は眞暗だッ、魂の有る事はそりや分つて居るけれど、如何して世の中を渡つたら好えだか、それが己にやがら分んねえだもん……すべえやうがねえだ……」

とはいふものゝ、心の底の底で、何とやらチク〜と針の先で刺されるやうな氣

がして、喰へば我が二ツに割れて、一ツの我が今一ツの我を、窃と何處へやら推遣らんとする氣味がある。從來随分種々の法をかいて、小前の百姓共に一杯も二杯も喰はした覺があるが、今は我と我鼻毛を窃と抜かうとしてゐるかのやうで、それは我にも然う思はれぬでもない。

「己自分と喧嘩してゐるだ」と眉を奇せて、「そりや成程不正氣が心魂にへばり付いてるだから、罪も深かるべえけど、だつて罪ツ氣を無くなす法がねえだもん。精進日が来たやら、喰はねえことにして、それ迄は否でも應でも我慢して羶肉を喰つてる外爲べえやうが無えといふもんだ。」

爲べえやうが無いやうなもの、此處に一人でいつまでも斯うしてゐるは策の得たるものでない。又段々に鬱ぎの蟲がかぶつて来て、氣が減入り出す。公園に居た時も、此處へ来る途中も、寂と大人しくしてゐた蟲奴が、此時になつて又むづき出し、太り出して、何とやら物の蔽さつたやうに、鬱陶しく、變な氣持になる。衝

と起つて、又ウオットカを一杯引掛けて、店へ出て見た。

「お多福め、何處へ往せをつたか？」と内々不平に思ふ。

幾人か胡亂さうに此方を視おこす。中にも兵隊髭が喰入るばかりに視上げ見下すその眼差の薄氣味わるさに、粉屋は意はず身を引いて踵々となる時、ヌツクとばかり鼻の前に衝立つた者がある。視れば脊の高い、赤襦衣一枚着た奴で、その兩袖は明き物か、肩をダラリと垂れて、飄々と揺めいてゐる。癩削けた蒼面の、灰色の眼ばかりを熱病やみの其のやうに光らせ、亞麻色の鬚髯は末窄まりの楔形で、それが爲に面が延びて見えるに、首筋細長く咽喉の凸出た段を成したところ、此奴何となく鶴の風姿がある。膝頭の手擦れた木綿の禪子に、フェルトを打固めた長靴を穿いてゐるが、年の頃は五十に屈きさうで、其割合には眼が若やいで見える。是も同じく粉屋の脊丈を自分量に測るやうな眞似をしてから、入代つて小座敷へ入る其眼に、

ふさぎの蟲

「田舎のお客ッていふなお前さんの事かね？」

「さうだねえ、己近在から来たッが……」

「ぢや一杯振舞つてお呉んねえ。」

「さア、飲まッしやい。」

「飲ましてお呉んねえな。」

「心得てるだ。」

と、ウオットカを注いで、口へ杯を當がつてやると、引く息と共に、チウとばかり一滴も残さず飲乾して了つた。

「殺與るべえかの？」

「一杯ばかりぢや殺に御用は無えね。」

「だら、もツと飲ますべえさ。」

「難有え……」

聲が高く鏗然と響く。二杯乾してから、漸く眼の中を爛つかせ、雙の頬を紅くしたのを見て、粉屋が麵包を斷り有合せの魚を添へて與ると、口で之を受取つて、ソファに腰を卸し、俯向いて脚へた殺を卓子の端に置き、急に頸を垂れて之を食ひ出したが、殺が落ちるを恐れて、始終受口をして、もぐぐ食つてゐる、その様子の慄然さ。粉屋はつくぐ哀れを催して、

「汝腕を如何したッ？」

と問ふ聲にまで自ら同情が籠る。

「腕かね？ 他愛もねえ事さ。なにね、酔拂つて、調革に捲込まれたんだ。それで忽ちグル／＼のボキン／＼さ。それから三月ツていふもの病院に入つて、擧句の果が何卒や一文ツて言ふ事になツ了つたんで。」

と口疾に言ひながら、粉屋の様子をぢろり／＼視てゐる。

「さぞ痛かつたんべえなア！」

ふさぎの蟲

ふさぎの蟲

と顔を翳める。

「なに、痛えたつて其時限りさ。治つた後まで痛かアねえけど、反つて痛くねえ今の方が不好。然うでせへなきや、何でも無えンだがね。」

「そりや又何とした譯だツペえ？」と是は一寸了解みかねる。

「だつて、お前さん、腕無しぢや法が附かねえもん。一文お呉んねえツて、さアと言はれたつて、手が出せねえや。其んならツて、まさか口で受けもされねえしね、厭んなツ了ふぜ。」

「違へねえ。」

と粉屋は笑ふ。

この不具漢はきびくとして、威勢が好くて、顔る陽氣な奴だ。眼付を見ても脱目は無さうで、腕は無くとも、氣合が面白い。こんなのに悪黨はない筈と、粉屋は思ふ。

「何の、人、面白くも無え、串戯ぢやねえ……」

と不具漢は首を振つて、途方もない大きな咳をする。

「アンナはもう直き来るだんべえか？」

と粉屋が問ねる。その顔を不具漢は急に顔を振擧げて、倍と睨むやうに視た眼付が、厭な薄氣味の悪い眼付であつたので、粉屋は少し狼狽して、あらぬ方へ眼を逸すと、

「お前さん何處で引掛つたんだね？」

「公園でな……ソノ知音になつた」と、と何故か返答を刻む。

「公園で？……」

「何故や？」

「なに、只聞いてみたばかりさ……」

「好え器量だア……」

ふさぎの蟲

と相手が益々不機嫌になるのは分つて居ながら、

「矢張し不具漢さ……」

と吐出したやうに言ふ。

「何故？」

「だつて、魂が無えもん。私あ機械で腕を割れツ了つたんだが、彼娘は貧乏で魂を拗れてるんだ。貧乏人の暮しほど情けねえものは無えてね。此奴をやつて来た者は原因も謂れもなく、皆不具漢になツ了ふ。」

と二人とも押黙る。不具漢は何やらそはくと、落着いては居られぬけに、ソフアの上でもちつくのを、粉屋は額越しに眺めやつて、是も何とやら居心がわるく、不機嫌になり、又しても例の持病が萌しさうなので、はらく思ふ。談話をしてると、それが幾分か樂だ——といふのは心外の事の噂をしてるれば、それに紛れて心内の苦痛を忘れる。

「もう一杯飲んねえか？」

「頂きやせう……だが、もう是ツ切りだ、此上飲らかすと、唱へねえ。」

「太夫になつたこと有るだかね？」

「大夫ばかりぢやねえ、種々なことをやつたね。まづ時計の直しをやつたしね、鐵道の油差もやるさ、角屋にもなつたし、材木屋の店番にもなる。まだ種々な事をつたが、ちよつくら一寸憶ひ出せねえ。何しても、お前さん、もう老爺だからね。」

「そんな種々な商賣をや……」

と粉屋は談敵の話振りの活潑してゐるのに感心して、又二人とも口を噤む。

「アンナ女郎は何故こんねえ暇入れるだんべえ？」

「アンナかね！」と不具漢は忽ちへたくとなつて、「屹度來ますよ！」と干乾びた笑聲を漏して、「來ねえで如何するもんだ！……だつて、お前さん彼女に三兩與るツて言ひなすつたらう？ 三兩になるのに來ねえ筈はねえ。三兩はさて置いて、只の

一兩だつて……へん、何する女だ！」

と細長い身を曲らせて、咳入つて、

「私やね、彼娘を六歳の時から知つてるんだ。舊い馴染さね。能く抱しちや、餓頭を買つて與たもんだあが、今ぢや反對に彼娘の脛齧りだ。昔し餓頭を買つて與つた因縁で、今は麵包とウオットカを買つて貰つてるんだ……變れば變る世の中さね……人間は可憫な物だ。だが、世の中ツていふもんは斯ういふもんなんだから、虱の卵も同然な人間なんぞが、何と思つたつて追付く事ちやねえ。世の中の事に何一ツ寸法通り行つてねえ事は無えンだから、辛えたつて何も泣面をするにや當らねえ——泣面したつて仕方がねえや。足腰の立つ間は生きて、立たなくなつたら、死ぬばかしよ。ねえ、何も理窟はねえ。そいつを人間といふ奴は種々理窟を附けて言ひたがるやつさ。ね、好しかね？ 彼娘にしろ、私にしろ、又お前さんにしろさ、皆人間といふものは小供の時から何も角も悉皆召上げられつ了つて無一物なんだから、

幾ら生きてみた處で唯業を晒す外能は無えツていふもんだ。それに違へねえだらう？ ね、何も理窟は有りもしねえものを、そいつを皆が種々な事言ふな、あれは不當さ。謙語さ。私や昔しは然うは思はなかつたから、手前の事ばかりやねえ、人の事迄苦に病んで、一體全體物の道理ツていふもんは、滑つたの、顛んだのと、ひねくり引廻したもんだが、今ぢや糞でも食へだ。人間の身の上は成るようにしか成らねえもんなら、成るように成らせとくばかしさ。それにや、そりや仔細もあらうけれど、己の知つた事ちやねえ。これが天理といふものだから、背く事出来ねえ、又人間に背ける筈のもんでもねえ。だつて今日世の中の事を何も角も心得てるやうな面してる人だつて、實は何も分つちや居ねえンだもの。私や偽言は言かねえ——人間の中でも一番利口だつて言はれる手合と打衝突つて此話をしてみたんだ——書生さんだの、お寺の和尚さんだのとね。へッ、皆何だ角だ種々な理窟捻くるけど、馬鹿けてる、こんな馬鹿けた事あねえ！ 萬事が天理通りに成つて行くものを、理

窟捻つたつて、仕方が無えぢやねえかね？ 天理に背かうツたつて、人間の恃みにするな智慧だが、その智慧からが天理通りに外ならねえんだもの。ね、好しかね？ 何も六かしい理窟は無え。だから、人間は成るようになつて、蕩擻くもんぢやねツていふんだ。そりよ下手に蕩擻きでもして見なせえ、運が逆になつて屹度酷い目に遭はあ。運といふ奴あ、詰るところ、手ンくの持前や慾で出来つ了ふんだ。持前や慾で混雜する處が運の正體よ。これが装婆から出た装婆のソノ……こ、こ、骨法といふものよ……ね、好しかね、解つたかね？」

と胡亂な言を文もなく陳べ立て、熱して火焰を吐かんとする、その調子が實に奇で、憤々として骨に徹する恨に堪へぬが如く、又全く望を失つて悄然として萎れたる如く、或は誰やらを嘲り、何やらを笑つて、天理を持出す時には、聲を潜めて妙に力瘤を入れ、これには理もなく恐れて畏こむけれど、天理が如何な物やら恐らく當人にも胡亂であらうと思はるゝ。

粉屋は此男の此話は餘り能くは分らなかつたが、之を聴くと妙に畏氣が着いて、胡亂な言葉も何をか説明するが如く感じられた。で、不具漢が喋べり込んで、息詰つて、稍口を噤んだを機に、深く思沈んだ體で、おそろく、

「だら、人間は何も角も皆天理詰め、身搖きは出来ねえだね？」

「一寸も出来ねえ！」

と不具漢は眼を剥いて力むだが、やがて粉屋の方へ蔽さるやうに屈みかゝつて、

「天理だ！ 人間の智慧の届かねえ理窟だ！」

と眉を釣上げて、仔細ありけに頷き、

「誰にも何も分らねえ……世界は闇だ！」

とばかり、首をば胴へ畳み込むやうに窘めたが、若し腕が有つたら、此處らで何か薄氣味悪い手真似をする所であつたらう……

ふさぎの蟲

「だから、成るやうに成つて、愚癡を漏すなッていふんで、別に仔細は無えんだ。」
「いかさまな……。」と粉屋も歎息する如く言つて、物思はし氣に髻を引きく、肩を佶と八字に寄せてゐたが、

「だら、魂は何となるだ？」

「魂？ 魂は何さ、早い所が、居酒屋か何かで成長つ孩兒さ。婆婆へ出た魂は差詰こいつだ！ 種々に迷はされる……。」

「だら、人間にや氣イ咎めるッていふ事有るだんべえ？ 氣イ咎めるんだら……。」

「ソラ來た！」と不具漢が顫で掬つた。

九

せかくと息だはしさうに、顔さへ眞紅にしたアンナの姿が入口に現はれて、大黒帽を自暴に横倒しに冠り、浮世を茶にした細目の髻面が其肩越しにヌツと出た。

「叔父さん！ コスチャを引張つて來たよ……あゝ、草臥た！」

「ナニ、コス公を？」と不具漢は急ち赫と景氣附いて、「そいつあ素敵だ！ 今夜は面白えぞー サア、コス公、ズツと此方へ通つた！ ね、旦那、此人は、お前さんの前だが素敵滅法界端歌の名人だ！ それこそ私の魂を打込んでる男だ！」

とかう紹介されてアンナの腋の下を搔潜つて入つて來た者を見れば、瀧削けた、血色の悪い、猫背の、胸の凹窪だ若い男で、薄い唇を心持開いた隙から、黒い、齒鹽で臺なしになつた齒を微露せてゐる。

忽ち座敷が賑やいで、新來の者が背負ひ込んだ思ひくの臭ひにいきれ臭くなる。浮世を茶にした細目の髻男を何かと思へばハーモニカ彈で、來るや否や卒然ソファの端に腰を卸して、夥しく壓板の有る大きなハーモニカを膝に搔載せ、威勢の好い高い音色を一寸出して見て、得々として粉屋の面を視たが、衝と杯を引寄て、ウオットカを満々と注ぐ。

ふさぎの蟲

アンナの外にまだ娘が一人来た。その名をターニヤといふのは、連なる脊廣を着た、職人としては爪端が尋常過ぎ、さりとて小店の店番とも見えぬ若い男の言葉で分つたが、此二人は窓際に座を取り、アンナと、ハーモニカ弾きと、粉屋と、不具漢と、コスチャと、かう五人は卓子を圍んで一團を成した。店も空卓子一ツ無い程客が立込んで、酔漢の四下構はぬ高調子に喚く聲は屋を撼つて、ガンと耳鳴がする程の喧しさ。

コスチャは深く陥んだ眼の、目縁の下が薄黒い男で、赤襦衣の上に袖無しを被つて、長靴を穿いてゐるが、是は不具漢と何やら密々話に餘念のない此方では、アンナが味な微笑をして何やら囁くを、ハーモニカ弾きは耳を傾けて聞きつゝ、時々冷淡い面をして粉屋の方を視る。

頭が支へたやうで、一座何となく冴えぬ中にも、粉屋は此程の面が竝んでも皆知らぬ面で、而も誰も構ひつけて呉れぬに、稍狼狽すると同時に、何となく身を引こ

抜かれて、異つた處に据ゑられたやうな気がして、先程から仰飲けたウオットカと不具漢との談話で、どうやら糲糊と霞が掛つた頭腦でも、此處は一番旦那に成り済して此奴共に取巻かれねば收まらぬと思ふ。此時アンナとターニヤは面を視合せて、何が可笑しいか笑ひ出す、その尾に隨いて脊廣も無邪氣に高笑ひすると、ハーモニカ弾きが樂器を鳴らして、餘音の永い騒々しい音を出し、不具漢とコスチャが傍の者には何の事とも得知れぬ言を二言三言々交す。

えへんと粉屋が咳拂ひをしたのは一座の注意を惹く爲であつたが、孰れもそれと氣取つたか、急にざわつき出して、卓子近く居寄り、アンナはソファを飛下りて粉屋と竝んで一ツ椅子に腰を掛け、窓際の二人も來て仲間に入る。

「さア、皆の衆、口解きだ、グツと一杯づゝ引掛けて貰ひますべえ」

と粉屋が挨拶を述べたが、其述べ振りに如何にも旦那らしい貫目もあり、位も備つて、我ながらいしくも言つたりと思ふ。

皆グツと乾す。不具漢には竝んで居たコスチャが介錯して飲ませる。

「汝や」と粉屋は不具漢を顧みて「一座の中でも何だから……」と其肩に眼を留めて、言淀んで「一ツ世話人になつて肝煎つて貰ふべえか。何でも構んねえだから、面白く、大浮れに浮れるだ……さア、もう一杯飲つて景氣イ附けべえ。」

「オット承知。」

と不具漢が諾む。飲めば飲む程、これの眼は大きく開いて喉元が段々鳴り出す。

「ぢや、もう一杯引掛けてから、合唱と出掛けべえ、な、好からう？ アン坊が音頭を取つて、コスチャ、お前が後を續けるのよ、而してマルクさんがハーモニカを弾くんだ。」

皆一度に喋り出す。脊廣は聲が足らぬから、合唱にならぬと言ひ、ハーモニカ弾きも之に賛成して、知つたか振りにむやみと術語を吐き散らす。

「さうとも、合唱になるもんか。だつて皆強音と言つて甲高な聲ばかりだもの。」

これでやつたら犬の遠吠になつた了はア。三部合唱ならまだ物になるかも知れねえ、三人で諡ふのよ。」

アンナは大分酔つたか、はしやぎ出して、猫のやうに身を擦付けて粉屋に甘えかかる。粉屋はグツと位を取つてゐる積りのが、いつしか溶けさうな笑顔になつて、密と敵娼の胴の湯を捻る、捻られてアンナが、すめた聲を立て、其手を打つ、とかう二人が次第に夢中になつて戯れてゐる側で、餘の者は謠物の評議で、やツさもツさと悶着する。

小座敷の入口には如何にも此家の客らしい風體の者が、入代り立代り現はれて、窺き込むでは引込む跡に、又他の顔が窺き込む。

「然うぢやねえツたらー！」

と不具漢が焦聲で喚くを、ハーモニカ弾は太い陰氣な聲で、
「うんにや、然うだよ。」

と受ける。

コスチャは此悶着には關係なしに、ソファの隅へ陥落んだやうに凭れ、胸を突出して、眼を細くして居たが、忽ち何に感じてかサツと顔色を變た時、

「コスちやん、お詣ひな。」

とターニヤが甲高な聲を筒脱けさせて、卓子の上へ頬杖をつく。竝んで居た脊廣が粉屋の方を尻眼に掛けつゝ、其耳を嗅いで何やら囁いだ時は、粉屋が恰も敵娼を抱寄せて、毒酒を飲ませようと、小盃を其口の端へ持つて行くところで敵娼のアンナは面を反けて一寸嬌態をやる。ターニヤは蒼い濁つた眼で氣の無さうに之を見て、又舊の位置に戻り、ハーモニカ彈きに向ひ、

「もう、好いわ、そんなに言はなくツたツて。」

不具漢はハーモニカ彈きの方へ身を捻ぢ向けて、口角に沫を飛ばし、能く徹る聲を張揚けて、

「うんにや、然うぢや無えツてことよ！ 何でも劈頭に哀れッほいもんをやつてよ、先づ氣を鎮めねえぢや不好、そいでなきや、歌が身に染みねえだらうぢやねえか。」

「ぢや、如何しよリツてんだ？」

とハーモニカ彈きは兎角不具漢を信用せぬけに、眉に八字を寄せて、口をもぐもぐとやる。

「どうもかうもねえや——人間の心ツていふ奴は泪もれえもんだ……好しかね？」

だから、劈頭に（松明か）、（日は西へ）で水を向けると、奴さん忽ち耳を引立つて、寂然となる。そこへ附込んで唐突に（深靴）か、（水ツ溜り）をぶツ食はして、構ふ事ねえから、自暴に、火の附くやうに、煽るんだ。煽ると、奴、赫と勇つて来る。そこで、其氣を逸さず、さツさ浮いたくゝと誘つて見ねえ、もう堪らねえや。がらり調子を狂はしツ了つて、命も竈も何ちも要らねえと來らア。何ちも要らねえンぢやねえ、まだもツと如何かしたくツてならねえやつさ。如何かしてえ、くで、足搔

く中にも、ぞくぞく嬉しくなつて來やがツて、それこそ世の中陽氣でお目出度やよ……」

と調子に乗つて、息を逸ませて、妙に身體を揺り立て揉み立て、つんのめりさうになつて騒ぐ。店の方は彌が上にも喧々と酔しれた聲が紛糾つて、耳も聾ひんとする程に騒がしい——その中で、コスチャが高く徹る聲を聲尻永く引いて、しをらせしをらせ悲しげに、

(かき曇るウ、ウ……)

と謠ひ出したは孤兒の歌。

「シューッ」

と不具漢は蛇の鳴くやうな聲を出して、ギツクリ反身になり、バツと大きく開いた眼で、一座を一巡視廻したところには、多少の掛念もあり、愉快もあつて、皆の助勢を頼むやうにも見える。其時一座忽ち水を打つたやうになつて、皆の目がコス

チャの面に集まる。コスチャは血の氣の無い面をして、ソファに腰を掛けたまゝ、わなくと開いた其口からは、力は有りながら、少しかすれた、如何にも肺に故障の有りさうな聲が流れ出て、打震ひく、一聲は一聲より上調子になりゆく。

「ターニヤ、後生だ、後を續けて呉んねえ。」

と不具漢が祈るやうに密と言ふ。

(空に悲しき風の音……)

とコスチャが直ぐ平めた調子に落ちて來る其顔を、ターニヤは平氣で一丈見て、何の、此様な物の後を續ける位、お茶の子だと言ひたさうな様子で、びつたり頬へ手を當て、またコスチャの歌の切れぬ中に、もう謠ひ出す。

(物思ふ身に音づれて、)

(難面も誘ふ袖しぐれ)

又コスチャの番で、身動きもせず眞になつて歌を續ける。血色も悪く、干乾びた

やうな小男の、猫脊の、窘むだ身に、如何して此程力の有る聲が潜むかと、異まれる程の美音で、歌の文句の進むに随つて永く餘音を引く其聲が、泣くが如くに戦き、消えんとして未だ消え果てぬ中に、ターニヤの寂のある中音が、物思はし氣に悲し氣に起る。それを聞けば、便りない程打沈んだ、底は如何やら神祕に通ひさうな、打平めた一本調子で、これが又歌の文句を一入哀れ氣に聞かせる。小座敷の入口は一杯の人で、皆赤い汗ばむだ顔を並べて、感に堪へて聽惚れてゐるその背後には、店の何處かで、相變らずコップの鳴る音、酔漢の管巻く聲がして、それが次第に鎮まり行くと、入口の聽衆が段々小座敷へなだれこむ。

(いつそ曠野へ世を遡水の)

(にけて跡なく……)

とコスチャが面を赧めて、身に染みぐくと謠ふを、

(跡なく逃けて……)

とターニヤは引取つて、餘所の愁ひを歌ひ顔に、これは又平氣に、

(草に隠さん憂き思ひ……)

それよりして、二人の聲が一ツになり、生温い、聞くからに氣も萎えぐとなる調子で、ウオットカ、煙草、汗の香に充ちぐた座敷の中を漾ひ、忽ち泣出したやうに戦々と震へ、此室の息詰つたを嫌つて、戸外へ脱出さうとして、蕩搔くのかと怪まれる時、コスチャの聲が、確と切れて、ターニヤの獨吟となる。

(父母もあらで甲斐なき身一ツを……)

コスチャが更にしんみりと、

(草よ隠まへ曠野の果に……)

此時新しい聲が一枚加はる。鼓弓の音色に似通つて、全然の喉音でありながら、思ひは深く勢のある聲、心底から恨みを泣くか、コスチャのそれとしツくり出合つて、しみぐくと世を捨鉢の、草の蔭で果てんことを懐ふ。これがコスチャの聲を助

けて、其ワキを勤めて行くのであるが、しなやかに、震へ／＼と、立歌の影にもなれば、餘ンの響にもなり、母音ばかりを拾ひく、泣くが如く呻くが如くに續ける。是は不具漢が眼を瞑り、喉を歪めて謠出したのであつた。其聲が切れると、今度はターニヤの聲が低く、なだらかに、豊富として調子で、又其後を續ける。之を織物で言つたなら、ターニヤの聲は喩へば幅廣の天鷲絨地で、これがパツと廣がつた上を、不具漢のとコスチャのとが、金糸銀糸と縫れつ縫れつ、面白い唐草の模様を繡出して行くのである。

便りない孤兒の世を歎ち草恨み泣で、一座はしめんりと露に濕つたやう。中にも粉屋は先方から頽然と頸垂れて、身じろきもせず、眞になつて歌の唱歌に聽入つてゐるが、之を聴くと又例の氣が鬱ぐ。なれども此時は鬱ぐ中にも何處やらに、身に浸渡る程の甘たるい所はあつて、頽に心を誘られる。喩へば、絞り立ての牛乳のやうな、濃い、生温かな物を浴せられた心地で、浴せられたのが、次第に身に染みて

肉を浸し、骨を洗ひ、底に澱んだ鬱氣まで之にほだてられ、育てられ、それが爲め胸は塞がりながらも、それでも矢張氣が和らいで行く。かう紛糾つた感じの外に、別に尙ほ何處やらに燦かれてヒリ、とするやうな氣味があるが、それがいづれの感じにも纏綿つて、引括めて、怪しく甘たるい痛みとなる。かの胸に塞へた屈託の塊が解けて溶けて小さくなつて行くけれど、まだ胸の何處かに滯つて、それが業をすると言つたやうな鹽梅。

アンナは粉屋の肩を枕に、伏目になつた儘、惘々として了ひ、ハーモニカ弾きは物思はし氣に髭を捻り、脊廣は窓際へ退却つて壁に凭れ、妙に頸を延べて歌でも喰ひさうに口元を尖らせ、入口の聴衆は山のやうに押累つて、押合ひへしあひ動揺めいてゐる。

三人の歌者は、我歌に心を奪れて、夢現の間を諳つて行く其歌の節廻しは、或時は年來の深い罪を懺悔の祈禱の如く、陰鬱にして熱涙迸り、或時は病兒の泣く如

く、しめやかにして悲しく、又或時は總じて面白い露西亞歌のそれの如く、便りなく、儂なけで、思ひ切たる捨鉢の氣が溢れて聞える。

(獨り海邊につくぐと……)

とコスチャが身を揉むで、泣くのかとばかり諛ひ出した時には、自然と汗が額に浸出で、泪の如く頬を流れる。

(命つれなき身は捨小舟の……)

と不具漢が引取つて、之をば殆ど母音ばかりで諛ふ。熱と目を瞑つて鼻の孔を擴けたり、窄めたり、唇も下顎もそれに隨つてわななくと顛へる。

(浪にまかせて居る時は……)

とターニヤが便りない聲で、首を振りく諛ひ了つて、さて莞爾となつたが、如何にも儂なけに味氣なさうな笑顔であつた。

(いつか心もしをたれ衣の……)

とコスチャの中音が泣くやうに響いて、

(乾く間もなき我泪)

と不具漢の震聲で之を受ける。

三人の聲は泣きつ、泳ぎつ、今にもフツと途切れて立消しさうになるかと思へば、更に盛返して、消えなんとする節を呼戻し、再び之を諛ひ上げて、高くく九天の上へ運び行き、震へて、泣いて、更に九地の下へ落し來る。不具漢の聲は始終節の消えんとする時に、其切ない想を傳へ、ターニヤは只管諛ひ進み、コスチャは又しても又しても泣聲を振絞つて、此女の歌を追越し、又或る時は之を反復す泣くが如く祈るが如き、哀れなる此孤兒の歌は、かうして三人に諛はれて、いつ果つべくも見えなかつた時、忽ち粉屋が、

「やれ、待つて呉れツしやい！」

とかすれた聲を振絞つて、椅子を跳起き、

「もう我慢出来ねえ！ もうく、何としても我慢出来ねえツちやア！」
 顔は面熱りして紅く、ほろくくと落つる泪は髻を浸して、其處此處に濕毛の塊りを拵らへ、心は悸き氣も張弓の、一杯に睜いた眼の中には、感極つてたつみあがりの、猛然たる意氣は含みながら、何處やらに又見るも傷ましい色をも浮べてゐる。
 起上りざまにアンナを突放したので、アンナはあはや倒けさうになつたを、やツと耐へて、目の覺めたやうな面をして、牙えぬ鈍い眼色で不具漢を顧眄つたが、草臥た蓄生が能くこんな濁つた眼色をすることがある。

「腹中引掻き廻されたア、ほんに！ もう満足したと思へ。もうけんなりしたア。己が魂にや疵が入つてゐるだに、お前等そりよ引攔んで、ぐウらぐら、く、動かすだもん、耐んねえ。己こんねえした想したな、生れて初めてだア！」

とチホンが呼はる面をターニヤは鈍いうツとりした眼色で視たのみで、口には尙ほ平夷な豊かな歌の聲を絶たなかつたが、其聲は温いとばかりで、既う熱はなかつた。

た。

「やれ皆の衆！ 己、へえ此處ンとこで火を焚くやうだア——堪んねえ！ 今だから何よ爲るも知んねえぞ。出刃持つて来う、刃の方さ引攔んで見せるだア！」

と粉屋は怖ろし氣な眼を斜き、両手で胸を摩りく、喚いて、

「さア、飲んだ！ うんと飲め！ 此處らが浮世の真中だんべい！」

不具漢の聲がフツと途切れる。それと同時にターニヤも歌ひ罷むや、疾し遅し、周章で、ウオツトカをコツプに半分程注ぎ、グイと之を仰つた所は、矢張胸に焚く火があつて、それを消さんと焦心たかのやう。不具漢は歌擧句の氣が落着かぬけに頽然として黙つて一息吐いてゐる。何としてか一時に瘦細つたやうで、頬が削げ眼も濁つて、鈍く無意味に見える。

「おい、マルクさん、その葎酒を一抔飲ませて呉れんねえな。」

「面白かつた。お前歌は旨えもんだぜ。」

とハーモニカ弾は徐かに言つて、コップを不具漢の口へ當がふ。入口の聴衆も夢の覺めたやうになつて、話聲が起り、騒々しくなる。旨いと言つて褒める者もあり、惡まれ口を叩いて唆す者もある。

(さりとは如何になるのみ……)

と思ひがけずコスチャが泣聲を張揚けた。

始終目を瞑つた儘我と我歌に魅せられて、四邊の事は何も知らずに居たから、暫らく合の間を置いて、今や更にかう謠ひ出したのである。哄然と笑聲が起つた。先づ入口の野次馬が笑ひ立つて、ターニヤが之に笑ひ合せた。コスチャの夢中になつたのが可笑かつたのであるが、この笑聲に氣が附いて、炎ゆる感想に氣を逆上せたコスチャは、始めてバツと目を睜き、笑ふ人々の面を見廻して、恐縮して顔色を失ひ、忽ちに勢が挫けて、又舊の瘦削けた血色の悪い若者となる。

「アン坊よ、一ツ飲めえ！」

と粉屋はアンナに酒を進めて、

「飲んで些とはしやけえ！ 己も羽目外して飲むべえ！ おツ死んでも構んねえだ

……」

ハーモニカ弾は樂器を押取り、少し思案して、忽ちグツと反身になり、何やら恐ろしく陽氣な譜を弾き出す。

「如何だ旦突の浮れ出したことは！ え、おい、見ねえ、あのとほりだ！」

と不具漢が卓子の下で足で突くと、ハーモニカ弾は黙つて頻に首肯く。ターニヤは何時の間にか見えなくなつたが、脊廣は座敷の入口に衝立つて、店の騒ぎを眺めてゐる。無遠慮な奴が小座敷へ入つて来て、ぶうくしくも酒を飲倒すけれど、粉屋は誰彼の見界なく相手にして、見るく爛酔れて了ふ。アンナも酔拂つて、例の肩を揺り、甲高に、

「私い踊りたくなつちやツた。マルクさん、コマリンスキイを弾いてお呉んな！」

不具漢はソファからアンナのはしやぐのを視て、不機嫌な面をして、信と唇を噛む。

それをアンナは目敏く見附けて、嫣然しながら、

「あら叔父さん、そんな面しなくツたつて好いわ。どうせ、もう、かうなりや……身は破れ傘……だわ。二ツ命は、え、持ちやすまい……だわ。」

「お前は三ツ命が有つても、生れ變る度に畜生になる質だらう？」

と不具漢は忌々しさうに言ふ。

「これ、そんなえ言ふな。アン坊は好い娘だ、己うツ惚たア！」

と粉屋は大燥ぎにはしやいで、

「お前等の歌は身にこたへたア！ 己命の洗濯したア！ 己あ、もう、堪んねえ！

火ン中へ飛込めツてんだら、己、へえ、己、へえ、飛込むだア！……」

「何處へも飛込んぢや不好……それよか私にお酌でもして呉んなせえ。」

「飛込んで不好？ 何處へも飛込んで不好というだか？ こりや汝がのが道理だア！ 手え出せえ、握りツこしべえ。いや、ほんに汝にや手え無かつけ……だら、そら、接吻だア！」

と不具漢に抱付いて、へつたやたらに接吻をしちらす。

コスチャは誰も氣を附けて見て居る者が無いのを幸ひと、ウオットカを手酌で、幾杯となく引掛ける。

「露西亞物を弾いてお呉れツてば！ 私いが踊るんだからさ！」

とアンナはまだ強情を張つてゐる。

ハーモニカ弾きが遂に何やら不思議な音色を露拂にして、さて（丸太路を轟々通れば）を弾き出すを潮に、兩手を腰に、肩を揺りく、踊り出したるアンナの浮れ姿は艶に美しいもので、一座の好色漢皆其腰の邊へ目を惹付られて了ふ。これが狂氣水に氣の荒びた粉屋の鼻の先を、孔雀の足取りびらりしやらりと踊り過ぎつゝ、

ふさぎの蟲

目交めまでそれと水みづを向むけたから耐たらない、

「えい、糞くそッ！ 己おらも踊おどるべえ！」

と威勢いせいよく叫きんで粉屋こなやも起上たり、アンナの尻しりに随ついて踊出おどしたる足拍子あしびょうしは、これは又また頗する亂暴らんぼうで、ドツタン、バツタン。不具漢かたはは之これを見てニツと齒はを剝出むし、白眼しろめをグリ／＼顛倒ひっくりかす。

また野次馬やじまが鷹たかつて來きて、男女なんにょの踊風おどりかぜに興きようを催もよほして、ワツ／＼と笑わらふ。

「チホンの燥はく所ところを見みい！ これが人間にんげんの蒸返むしりかへしだア！ や、どつこい、く、うんとこ、どつこい！」

と粉屋こなやの氣焰きえんは當あたるべからず。

十

それよりして五日目いつかめの夜よる、停車場すてーしよんを出でて家路いへぢを辿たどる粉屋こなやの慘澹みじめさは、岑々つぎと頭かしらの

疼いたむ、大敗亡おほはの不機嫌ふきげんな身みを雇馬車やまひしやの上うへに躍おどらせ、胸むねには四日間よつかいん打徹ぶつとほしの暴飲わはれのみの形かたち見みとして艱なやましく苦くるしき想おもを包つつむ。歸かへつたら女房にようぼうが如何どうな顔かほして吾われを迎むかへよう、うまア、お前めへさんは復またた狂くるひ出した、と泣聲なみごゑを出だして喰くつて懸かり、年とし齡いは幾いく歳の、白髮しろがに愧はぢよの、子女こどもの手前てまへ面目めんぼく御座ござらぬかの、私わしは因果いんぐわで滑すべつたの顛ころんだのと、定さだめて陳ならべる事ことであらうと思おもふと、身みが縮ちぢむ程ほど厭いやになつて了しまつて、思おもはず腹立はらたし氣けに道端みちばたへプツと唾つを吐はき、

「チヨツ、是これだから浮世うきよは厭いやだア！……」

と口くちの中うちで呟つぶやく。

馬方うまかたは「停車場ていしやば」のバンテレイとて、風來ふうらいのバンテレイに紛まぎらはしい所ところから、かうした肩書かたがきのある話好はなし好きの男おとこ之これを聞附ききつけて、

「如何どうした、かね？」

「何なんでもねえ、此方こつちの事ことだ！ 疾とつと、走はしれえ！」

ふさぎの蟲

ふさぎの蟲

と粉屋が慳貪に言ふ。

「さうかね。だが、考へ込んで獨語を言ふツて事能くある事だよ。屈託が有ると能く其様した事あるだけんど、一體屈託ツていふ奴は……」

と喋べり止まぬ。

「黙まつて走れえ！」

と其鼻を折ると、

「黙まつて走れと言はッしやるだね？ だら、黙まつて走るべえさ。いと易い事だ」

と納得して、少し経つと又喋べり出す。

曇る夜の、野は黯澹と闇に包まれ、仰けば灰色の雲空を掩うて、動くとしも見えぬ中に、一處薄朦朧と明るい處のあるは、雲間を漏れ出ようとして出かねてゐる月の影で。馬車は馳て土手近くへ來る。

「もう好え、此處で下りべえ。」

と粉屋は馬車を下りて、四方を見渡した。四十歩許前方に、闇の中に、黒い稜立つた姿を見せてゐるは吾家で、其右手は井關。井關の微暗い水の面を視ると、寂然として動かぬだけに、何處やらに薄氣味悪い處もあつて、四下は森閑として何とな後が顧られ、向うの土手の枝垂柳のヌツと暗に立つ姿も、今宵は別けて怖ろし氣に見えて、何處ともなく水の滴る音が聞える……忽ち一陣の風が森より起つて井關の上を吹き通ると、其水は俄に立騒いで、ピチャ〜と幽かな悲しい音を立て、土手の柳は夢より驚き覺めて、是も同じく騒ぎ出す。

井關の水の一しきり風に騒いだのが次第に鎮まつて、又夢の底に沈み行くのを熟ら視れば、水面は尙ほ漣立つて戦ぐやうである。粉屋は之を觀て吻と太息を吐き、吾家を指して歩き出しながらも、口の中で、

「人の一生は是だ、漣だア……たんだ上面が動くばかりの事だ。そんだものを、幾ら考へたつて、人間の得體の知れねえな當り前の事でねえか!?」

ふさぎの蟲

ふさぎの蟲

(254)

とかう呟いで見たが、これだけでは未だ如何やら氣が落着かず、世間に對しても、自分に對しても、誠に、はや、面目次第もないやうな氣がしてならぬので、立止つて兩手で願の髻をむづと握り、グツと之を引張つてガクツとなる拍子に、大きな聲で、

「チホン、お主は汚ねえ老爺だなう！」

「何だね？」

と暗黒から「停車場」のパンテレイの聲が聞える。

「汝の知つた事でねえ！ 疾と、歸れえ！」
何處でか鶏の歌ふ聲……

(明治三十九年一月譯)

奇 遇 (ツルゲネーフ)

Passa que' colli e vieni allegramente,
 Non ti curar di tanta compagnia——
 Vieni, pensando a me segretamente——
 Chio faccompagna per tutta la via.

(歌の意は、岡を越えて来ませ、いそぐと来ませ、強ひて多くの連をば求め給うな、君一人にて来ますとも、道々妾の上を圍ひ給はゞ、妾を伴ひ給へるに同じからむとなり。)

自分の持村から五里ばかりの處にグリーンノエといふ村が有つたが、夏の中は屢々此村へ遊獵に往つた。其村の界限には野禽撃では恐らく郡中第一であらうといふ場

(257)

所が幾らもある。最奇の灌木の間や野面などを獵盡して、いつも日暮に此邊では珍らしいものにしてある、村近くの沼へ寄つて、其所から直ぐに旅宿に歸ることにしてるたが、旅宿はいつも取りついで、亭主は村の頭百姓をしてゐる信切な男である。沼からグリーンノエまでは半里計もあらうか、總て中凹の道だが、唯中ごろで小さな丘を一ツ踏さなければならぬ。此丘の上に一構の邸、といつた所が、住棄てた母屋一棟と園の外何もないが、邸がある。その側を通るのは大抵夕榮の熾の頃であつたが、今でも憶出す、いつも此家の窓をびつたり釘附にした所は盲目の老人が日向ほこりでもしてゐるやうに見える。老人さも信切さうな面をして路傍に躊躇むでゐる、此人のためには日の光が常闇に代つてから最久しくなるが、流石に未だぐいと擡げた面と暖かさうな頼とだけには日光を受けてゐる。母屋には久しく人の住まはぬ様子であつたが、邸内の小さな孫屋には猫脊で、背の高い、白頭の、活々とはしてゐるたけれど、沈着いた面相の、年老つた新平民音の奴隸也が住つてゐる。

いつも、孫屋の孤窓の下の造附の椅子に腰を掛けて、鬱々として物思はし氣に遠方を眺めてゐるが、自分を見掛けると少し起上つて辭儀をする、それも親どころでない、祖父時代の老僕に限つて爲るといふ例の落着いた、勿體らしい辭儀振で。度々話しかけてみたが、老人話好ではなかつた、唯その住まつてゐる邸の持主は老人の舊主には孫女に當る後家で、それには妹が一人あるが、二人とも市でなければ外國へばかり出てゐて、とんと本宅へ歸つて來ぬといふ事だけは聞いたことがある。老人自身も「此ねえに長生のを爲ちよれば、時よりは呼つまんねえ事だと思ふことも有りますけえ、えら長生のを爲ましたア」から、そこで早く此世を去りたいと云つてゐる。此老人はルキヤイヌイチといふもので。

一日自分が如何かして野面で暇取つた事があつた。野禽も随分居たのに、それに朝から静かで、狹霧が立籠めて、何處も彼處も夕間の瀟々たやうな、獵には恰好いといふ天氣であつた。遠方まで彷徨つて、例の邸まで來たころは、最う日はとつぷ

り暮れて、月まで出て、空は疾くに夜景色になつてゐた。園に沿いて歩いてゐるが、四邊は圓としたものである。

廣い往來を横に截れて、塵塗けの蓐麻の中を密と通つて、低い垣に寄添つて見ると、目の前に小さな園が銀色の月光に限なく照されて、宛然濕つたやうになつて、何やら佳い香が紛々として、露に濡れてゐるが、園の作様は昔風で、細長い芝生一區で出來てゐる。眞直な徑が四方から來て、中央で集合して、蝦夷菊の生茂つた圓い形の栽込となつてゐて、周圍は高い菩提樹が並び善く縁を取つてゐる。僅た一箇所其縁の二間ばかり缺けてゐる所があつて、その間隙から低い棟の家が僅か見透されたが、不思議な事も有れば有るもので、今夜は窓二ツとも燈火が射してゐる。芝生には處々林檎の樹が植ゑてあつて、その疎らな枝越しに穩かな夜の蒼空も見えれば月の恍した光も漏れて、樹の根方には其影が白ほい草を薄く斑に染めてゐる。園の一方には菩提樹が蕭々と青光に光る月の光を受けて薄青く見え、今一方には透し

透し

ても何も見えぬほどに黒々と立駢んでゐるが、折々怪し氣な籠つた音が、茂合つた葉の中にさら／＼と聞える所は、宛然木立が其下で消えて了ふ徑の森とした木下闇へ人を誘込まうとするやうである、星は空一面に覆れて、柔しい蒼い光をちら／＼と落して、靜に遠く下界を瞰下してゐる。片々の淡雲が時々月に懸つて、穩かな光を少しの間朦朧とした、底に明味のある暗霧に變て了ふ……四圍の物が總て恍惚として、生暖かな、佳い香のする空氣さへ靜まり返つてゐて、唯をり／＼小枝が落ちて、漣の起つやうにゆらく／＼とする……何か待焦れてゐるやうな、草臥れたやうな氣味である……垣の内を覗いて見ると、つい鼻の頭に眞紅な野罌粟の莖が草叢の中からすつと出てゐて、そのぱつと咲いた花の底には大粒の圓い夜露が薄光りに光つてゐる。何も彼も恍惚としてだらけて、宛然延上つて、身動をもせず、何をか待ちながら、空を向上上げてゐるやうである……此生暖な夜に眠入もせず何を待つてゐるのであらう？

物音を待つてゐるのである、靜まり返つて耳を澄まして生物の聲のするのを待つてゐるのである——けれども、ごそとも云はない。鶯は疾くに啼罷むで了つた……と云つて、齧びすがる虻のふつと唸る聲、圍の盡頭の菩提樹の向うの養魚桶の中で小さな魚のびちや／＼と跳る音、駭いて眼を覺ました小禽の眠むさうな啼聲、野中に遠く、人やら、獸やら、鳥やら、何が叫ぶとも聞分けられぬ程に遠く聞える叫聲、往來の方にする刻むやうな急足の音、などいふ鈍い音や幽かな響は唯寂寞を増すばかりである……幸福を待つのでなく、憶出したものでもなく、何とも口には言はれぬ心地に萎されて、身動きをもせず、この月に照され、露に濡れて、寂寞としてゐる圍の前に佇立むだま、黯淡い中にうす赤く見える二ツの窓を、如何いふ積りか、傍眼も觸らず諦視めてゐると、ふと家の内で鳴物の調子を諧せる音がした——音がして、浪のやうにうねりを打つて響き渡ると……空氣は焦心で響き反へす……自分
は我知らず慄然とした。

鳴物の音に續いて女の聲で歌を唱ひだした。一心に聽入ると……や、驚くまい事か……二年前に伊太利のソルレントで此歌も此聲も聞いた事がある……それ……
 Vieni pensando a me segretamente……

あれだ、あれに違ひない……如何して聞いたかと云へば、まアかうである。或時海邊で久らく散歩してから、宿へ歸らうといふので、町を急足に通つて來たことが有つた。其時は日が暮れてから最う餘程経つてゐたが、南國の事であるから、華やかなもので、露西亞の夜のやうに寂然として悲しくなるのは譯が違ふ。なかなかそんなものでない！ 人で云つたら、先づ若い果報な女といふ所で、鮮か、綺羅びやかで、美しいものだ。月はおそろしく皎か、煌々する大粒な星が青黒い空に紛々と覆れて、黄ばむ程月に照された地面に物の影が黒々と際立つた見える、町の兩側には家々の園の石垣が建列ねてあつて、蜜柑の樹の曲りくねつた枝などが出てるたが、金の毬見たやうな、重さうな實が葉隠れに見えたり、華やかに月に差出

て、鮮に赤らむだりしてゐる。樹は大抵花を持つて、柔しく白むでゐて、空氣は飽まで強い、鼻を貫くやうな、殆ど氣の重くなる程の、何とも云へぬ佳い香がする。けれどもかうした美景も疾くに眼慣れて了つてゐたから、自分は唯一刻も早く旅宿へ歸らうと思つて、さつさと歩つて來ると、側の石垣の上に小さな觀樓の中で、ふと女の聲がした。何やら聞慣れぬ歌を唱つてゐるので有つたが、その聲が歌の文句に見えた、待つ身の切な嬉しい想を籠めて、さも懐かしさうで有つたので、思はず立止つて、ふつと、仰向いて見ると、觀樓には窓が二ツあつたが、二ツとも透戸（ジャルージ）が卸してあつて、その狭い隙間から、ほんやり薄明が射してゐる。Vieni, vieni と繰返して歌が罷むと、敷物の上へ滑落した六絃琴のかと思はれる絲の音が幽かに聞えて、衣服の音がさらりとして、床が纒か軋む。片々の窓を漏れる火影が消える……誰やら窓の所へ來て身を寄せたらしい。思はず二足ばかり後へ退却ると、不意に透戸がごとりと云つて、ぱつと開いて、白い衣服を着た仇な姿の

女が美しい面を衝と出て、手を延しながら、*Son tu... 耶君*の義？といふ。何んと答へて好いか判らぬので、狼狽してゐる中に、女もおやつと云つて、身を後方へ引いたかと思ふと、透戸はぱつたり閉つて、觀樓の中が一層暗くなつた。大方燭火を次の間へ持出したものであらう。自分は身動きもせず佇立むだ儘で、久らくは正氣が附かなつた。ふいと出た女の面はおそろしく美しかつた。ちらと見たばかりだから、面相の細かい所まで見て置く暇は無かつたが、瞥と見たばかりでも、深く強く心に浸みて……その時既に一生忘れられまいと思つた程である。觀樓の壁へも、女が首を出した窓へも、月がまともに射してゐるが、其光の中に大きい黒眼勝の眼が美しく光つて、解しかけた黒髪が少し擡げた圓い肩へ浪の曲つたやうになつて、ふつさりと垂れてゐて、しなやかに屈むだ所に優しきも有れば、耻かしさも籠つてゐて、早口ながら善く徹る小聲で聲を掛けた、その聲がさも懐かしさうで、——おそろしく好かつた。随分永い間一ツ處に立止つたまゝ、でゐるが、聽て少し傍へ寄つて、向

觀の垣の影へ入つて、其所から、未だ何事か有りさうに思つて、鈍な怪訝な面をして觀樓を眺めて、聞耳を立て、ゐる、注意を張詰めて聞耳を立て、ゐると……薄闇くなつた窓の彼方で、誰かの靜かな息氣遣が聞えるやうな時もある。彼此する中に、遠方に人の足音がし物音をして忍びやかに笑ふ聲のする時もある。彼此する中に、遠方に人の足音がして……段々近寄る。只見れば、自分と殆ど同じ程の背恰好の男が町盡頭に顯はれて、全然氣が付かなつたが、觀樓の側に耳門があつた、その耳門まで急足に來て、卒然その鐵輪を二度程突鳴らして、待つてゐながら、小聲で、*Ecco ridente,* と唱ひ出すと、耳門が開く……男はずつと門内へ入つて了つた。自分は身震をして、首を振つて、手を啓けて、手荒く帽子を突きめらして、膨れながら宿へ歸つて來たが、その翌日は日盛に二時間ばかり觀樓の前を往きつ戻りつ無駄足を踏むで、其晩タツソ一の宅をも見物せず、ソルレントを發つて了つた。

といふ譯であるから、矢張同じ聲で同じ歌を唱ふのを、こんな邊鄙な露西亞の片

田舎で聞いた時の自分の驚は如何なで有つたらう！あの時のやうに、今も夜で、燈火の射す餘所の小座敷で不意に歌を唱ふ聲がしたので、その上自分も一人きりである。胸が頻りに躍り出す。「夢ぢやないか？」と異むだ。すると又最後の「サキニ」が聞える……窓が開くであらうか、女が面を出すであらうか、と思つて見てみると、窓も開けば、女も面を出した。間が五十歩も隔たつて、淡雲が月に懸つてゐるけれど、直ぐにそれと知れた。あれ、ソルレントで見懸けたあの女に違ひない。今夜はあの時のやうに素肌の腕を延しはしなかつたが、その代り徐と其を組合せて、窓に持せて、默然として身動をもせず、何處ともなく園の中を眺め出した。如何にも彼女だ、忘れられぬ面相も、類の無い眼付も其儘である。今夜も潤大した白い衣服を着てゐるが、ソルレントで見たよりは幾らか肉付いたやうで。其様子を見ると、安心してほつと一息してゐるらしくて、時を得顔に美に誇つてゐながら、念が届いて満足したといふ氣味が何處かにある。女は良久らくの間身動をも爲すにゐるが、聽

て室の内を顧つて、不意に起直つて、徹る聲で高く「Addio!」左様と三度呼ぶとその美音が遙か遠方まで響き渡つて、弱まつて絶えぬになりながら、菩提樹の上や、背後の野中や、處々方々で久らくどよみを作つてゐるが、其間四邊の物が總て此の聲に涵されて、反響を鳴らして——女の氣が充満としてゐるやうな鹽梅であつた。さて窓が閉る、家内の燈火は程なく消えて了つた。

はつと我に復へるや否や——尤も餘程間を置いての事であつたが——我に復るや否や、直に園に沿いて母屋の方へ往つて、閉切つた門まで来て、垣越に覗いて見たが、内の様子に何も變つた事はない、唯片隅の庇の下に馬車が一輛引込んであつて、その前半部の、乾いてはゐるが、泥だらけに爲つた奴が、月に白むで際立つて見えるばかりで。住居の窓は此前見た通り戸締がしてある。つい言遺れてゐるが、此一週間ばかりと云ふもの此村へは寄らなかつたので。不審に思ひながら、三十分餘も垣外を彷徨いてゐるので、遂に年老つた飼犬が目を注げ出したが、それでも吠えは

せずに、唯しよほくした眼を細くしておそろしく、意味ありさうに、闕の所から覗いてゐる。自分も其意が悟めたから、其處を去つて三四町來ると、ふと背後の方で蹄の音がする……程なく一人の男が驢馬に乗つて、大駟を追つて來て、自分の傍を乗切る時、急に此方を振向いて、目深く戴つた帽子の下から驚のやうな鼻と立派な髭とを瞥と見せて、其儘往來を右へ折れて、直ぐ森に隠れて了つた。あ、彼男だ、と思ふと何だかこそばゆいやうな氣がした。彼男だと思つたも僻目ではあるまい、どうも其風體がソルレントで園の耳門を入る所を見かけた彼男の風體に酷肖である。半時も経つた頃には、既うグリーンノエの旅宿に歸つてゐて、亭主を覺して、直ぐ隣の邸へ來た者はあれは何者だと尋問をはじめると、亭主は辛うじて女地主が來たのだと答へる。

「だがさ、如何な女地主が？」と急込んで問く。

「どんねえツて——貴婦人達でがんさ」と甚だ氣の無さうに答へる。

「だがさ、如何な貴婦人達だと云へば？」

「どんねえツて、世間並の貴婦人達でがんさ。」

「露西亞の人か？」

「でなきや何處んもんだあね？ 知れた事だ、露西亞の人でがんさ。」

「外國人ぢやないか？」

「はあ？」

「來てから最う餘程になるか？」

「知れた事だ、此中でがんさ。」

「永く居る積だらうか？」

「どうでがんすかね。」

「金満家だらうか？」

「どうでがんすかね。金満家かも知んねえ。」

「誰か紳士風の人が一所に來はしなかつたか？」

「紳士風の人か？」

「さうさ、紳士風の人か。」

頭百姓は溜息を吐いた。

「やれく睡むたい事だ」と欠びを爲て、「う……うん……うんにや……御座らつしやねえやうでがんですよ」と云つたが、突然「知りましねえ。」

「まだ近所にはどんな人が住まつてゐる？」

「どんねえな？　どんねえつて——いろんな人が。」

「いろんな人！　何といふだらう、名は？」

「誰があね、女地主様かあね？　近所の地主様達かあね？」

「女地主さ。」

頭百姓はまた溜息を吐いた。

「名は何ちふかと聞かつしやるだあね？」と口の中で云つて、「何ちふか知りましねえ。姉子様の方は確かアンナ、フョードロヅナといひましつけえ。妹子様の方は……うんにや、知りましねえ。」

「では姓なりとも、責めて。」

「姓？」

「さうさ、姓さ——名字さ。」

「名字……さやうさね。ほんに知りましねえ。」

「二人とも未だ若いか？」

「うんにや。若え事あがんせんよ。」

「では何歳位？」

「さやうさね、妹子様の方はもう四十餘だつべえ。」

「虚言を吐け！」

頭百姓は口を喋むだ。

「さうかね——そんだったらお前様の方が能く御存じだあ。私い知りましねえ。」

「ちよッ、一ツ事ばかり云ふ！」と憤々として罵しつた。

露西亞人がかういふ返答を爲出しては逆も縁な事を聞出せる氣遣のないことは經驗で承知してゐたから（それに亭主は今臥床へ入らうとしてゐた所で、返答をしようとしては、こくりくりと辭儀をして、邪氣なく吃驚して眼を睜つて、心地よく潮して来る睡氣に粘着いた唇を辛うじて引放してゐたので）——自分は斷念めて、夜食もせず小舎へ歸つて了つた。

が、なかく眠付かれない。「何者だらう？」と不斷に不審がつてゐた。「露西亞人だらうか？ 露西亞人にしては、伊太利語を用ふのが可異い……亭主め若くはない。なぞと云ひくさる……虚言を云つてらア……が、何者だらう男は？……全然解らん……それにしても餘程奇遇だわい！ どうしてかう二度も續けて……が、待てよ、

何者で何故此處へ來たのか、如何かして嗅出してやらう……」といふやうな零碎なしど氣ない事を思つて胸を騒がして、夜更けてから漸う眠入つたが、奇怪な夢を見た……何でも日盛に何處かの荒野を彷徨つてゐるやうである——と見れば、眼の前の焦けるやうな黄ばむだ砂の上を大きな物の影がすつと通る……仰向いて見ると——例の美人が長い白い翼を負つて、白々とした風をして、空中を飛んで行きながら、自分を鷹ぐ。跡を追つて驅出しては見たが、先は身軽くふはくと飛んで行くのに此方は地を離れて昇ることが出来ないから、唯空しくあこがれて手を延すのみである。美人は向うへ飛んで行きながら、「Addio! 如何して貴君には翼がないの……」
Addio!』といふ。すると四方から Addio と響き返へす。砂粒の黄い聲で Addio と叫ぶのがきい〜聞える……その又〜といふ音が耳の聾るほど鋭く響く……自分はそれを蚊か何かを拂退けるやうな手附をして拂退けて——きよろ〜眼で美人を捜すと……美人は最う雲の形に變つて了つて太陽を目がけて騰つて行く。太陽は戦き

つ搖ぎつ笑ひつして迎へのために黄金の長い糸を手繰出すと、見る／＼糸は女を絡むで、女はその中に絡けて了ふ。自分は狂氣の如くになつて、聲を限に喚いた。あれは太陽ぢやない、太陽ぢや、あれは伊太利の蜘蛛だ。誰に露西亞行の旅行券を貰つて來たのだ？ 今に尻を割つてやるぞ、余は彼奴が餘所の園で蜜柑を竊む所をちやんと見て置いたからな……」然うかと思ふと、また狭い熊逕を行くやうな心地がする……いそ／＼として行く、何處へか一刻も早く行着かなければならぬ、何か前代未聞の幸福な事が先に待つてゐるのである。すると、おそろしく大きな岩が鼻の先にむつくり崛起る。右へうろ／＼左へうろ／＼して脱路を索すけれど——脱路はない！ それツ、岩の向で Passa, passa quei colli……といふ聲がする。自分を呼ぶのだ、その聲が、さも悲し／＼に繰返して呼んでゐるのだ。憂ひ悶えて駈廻つてどんなに狭い割目でもと索すけれど……悲しい哉！ 何方を向いても直立の壁だ…… Passa quei colli とまた哀れな聲がする。泣出したくなつて、滑かな石へ身を打着

けて、狂氣の如くになつて、それを引掻くと……ふいに眞闇な脱路が目の前に開く……氣の遠くなるほど嬉しく思つて、駈出すと……「無益な事だ！ 何に通らせるもんだ……」と誰やら喚く。只見れば、ルキヤーマイチが行先に立はだかつて、拳を揮つて可怖しい權幕でゐる……鼻薬を宛がはうと思つて、急いで隠袋を探つてみたが、何も無い……「これさルキヤーマイチ、通して呉れよ、禮は後でする」といふと「あいや、疎忽めさるな、セニヨール 此は貴殿といふが如し西班牙語なり」と云つてルキヤーマイチが妙な相好になる。「拙者は奴僕では御座らぬ、人も知つたる武術の修業者、ラマンチャのドン、キホートにて候ふぞ、某生涯ヅリチーニヤを索ね巡りたれども、遂に邂逅ふこと能はず、されば他人の戀人を尋出すを阿容と指を啣へて觀て居られうや。」 Passa quei colli……といふのがまた聞えたが、此度は殆ど泣出しさうな聲である。「お通しなさい、セニヨール！」と自分は憤然となつて喚立つて、あはや飛蒐らうとすると……猛者の提けてゐた長柄の戟でぐさと刺られて、息氣も絶え／＼

になつて仰向けに其處へ倒れた……動くこともならぬ……すると、例のランプを持つて入つて来て、それを頭より高く品よく差擧げて、そしてそろりと自分の傍へ来て、屈むで視て、「此奴だよ。此剽輕者だよ！」と云つて、冷笑をする。「此奴だよ、私の身の上を探らうとしたのは」。すると、その持つてゐたランプの熱油が恰と自分の膚を負つた胸へたらりと滴る……ブシヘーヤ神戀の！と辛うじて聲を揚げると、眼が覺めた……

眠苦しく、一夜を明して、拂曉前には最う床を出て了つた。それから手ばしこく狩装束をして、直ぐと邸へ往つて見た。餘り急込みやうが甚かつたので、例の門まで來ると、漸う東方が白みだした。處々に雲雀の聲がして、燕鳥も樺の村立の中で啼いてゐたが、家の内はまだ誰も起きぬと見えて閑寂としてゐる。待ちかねて氣を焦ちながら、露深い草を踏しだいて彷徨して、棟の低い見すほらしい住居を間なく見やつては、此内に例の化生の者が居るのだなと思つてゐると……ふいに耳門が微

に軋むで、開いて、緞の「ガザーク」外套を着たルキヤイチが闕の所へぬつと現はれた。蓬々とした頭で、ぬつと面を出した所を見れば、平生よりも餘程氣難かしさうである。自分の姿を見て驚いた風で、再び耳門を閉めさうにしたから、

「老爺々々！」と狼狽て聲を掛けた。

「何用が御座らつしやるだあね、朝ばらから？」

と云つたが、籠つた、落着いた調子である。

「何ださうだね、御主人が歸つてお出でなすつたさうだね？」

ルキヤイチは默然としてゐたが、聴て、

「歸つて御座らつしやりました。」

「お一人でか？」

「妹子さまと。」

「昨日お客は無かつたか？」

「有りましなんだ。」

と耳門の戸を引寄せる。

「ちよいと、老爺……待つて呉れ……」

ルキヤーヌイチは咳をして寒さに縮み上つた。

「まあ全體何用が御座らつしやるだあね？」

「あの何かい、御主人はお何歳だい？」

ルキヤーヌイチは烏散さうに自分の面を視て、

「何歳だと聞かつしやるだあね？ よくは知りましねえが、何でも最う四十越して
るだんべえ。」

「四十越してゐる？ お妹子は？」

「妹子さまあ未だ四十にならつしやりましねえ。」

「へえ、然うか！ 別品か？」

「何方がね？ 妹子さまかあね？」

「然うさ、妹子さまさ。」

ルキヤーヌイチは微笑した。

「人によ如何ねえに見えるか知りましねえが、私には美しかあ見えましねえ。」

「では如何なだ？」

「えら醜悪だ。些とんべえ瘦つこけた方で。」

「はてな！ 御姉妹の外誰も來なさらんか？」

「何方も。誰が來るもんだ！」

「そんな譯はない！……余が……」

「やれく、旦那さま！ お前さまと話へえ爲ちよつたら、終結が有りましねえ、
と老人氣を焦つた。「えら寒い事だ？ もう御免のう蒙りますべえ。」

「ちよいと待つた……そら……」と豫て用意して來たチエトヴェルタークの銀貨を出し

て與らうとすると、手は急に閉る耳門の戸に撲たれて、銀貨は地に落ちて、ころころと轉がつて、自分の足下で伏さつて了つた。

「ちよッ、虚言つき老爺め！ ラマンチャのドン、キホートめ！ 饒舌るなと命けられたな……待て、その手は喰ふまい……」

で、自分は如何あつても必ず探り出さずには置かぬと我と我心に誓つた。けれども、如何して可いか解らぬので、半時間ばかりと云ふもの其邊を往きつ戻りつしてゐるが、聽てまづ村へ出て此邸へ来たのは誰であるか、また邸は誰の所有であるか、それを聞かして、それから再び取つて返して、而して事の明白になるまでは、それこそ、一寸も動くまいと決心した。例の女だからとて、全然外出をせずには居られまい、すれば白晝間近で幻影でない正體を見届けられぬことはあるまい、と思つたのである。村までは十町も有つたらうが、自分は足輕に活潑に歩きながら、直ぐと其處へ往つた、妙に氣が立つて靜止としてはゐられぬやうな心地がする、昨夜熱く

睡なかつたので、氣持の好くなるほど新鮮な朝の空氣に觸れると、神經が狂ひ出す。村で仕事に行く二人の百姓を捉へて、此徒から聞出される事だけは聞出したが、自分の立寄つた村は例の邸の在る所をも込めてミハイロフスコエと稱ふさうで、邸は故の陸軍少佐シルイコーフの後家でアンナ、フォードロヴナといふ者の所有であるさうだが、此後家にはペラゲーヤ、フォードロヴナ、バダーエヅァといつて、今まで獨身で通して来た妹が一人ある、最う姉妹とも沙汰過ぎた年配で、金満家で、始終旅行ばかりしてゐて、殆ど邸に居たことが無いから、下女二人と料理番一人の外は召使も無い、は可いが、アンナ、フォードロヴナは此頃莫斯科から妹と二人で歸つて来たのだといふ……さあ、是がどうも解らない、百姓にまで例の女の事が口留してあらうとは思はれない。と云つて、四十五にもなる後家のアンナ、フォードロヴナ、シルイコーワと昨夜見たあの若い美人と同人とは取つても附かん事だ。ペラゲーヤ、フォードロヴナも、噂で聞けば、餘り美しくないと云ふし、それにソルレント

で見かけた女をベラゲーヤは未だしも、バダーエヴァなどいふと思つてすら、首が蹙んで冷笑が出る。けれども昨夜その女を彼邸で見た……見たとも、確に此眼で見たのである。齒痒いも齒痒し、業も沸えるし、思ひ立つた事は飽くまで枉げぬ氣になつて、直様邸へ引返さうかと思つたが……時計を見れば、まだ六時にもならぬ。最う少し猶豫する事にした。といふものは、恐らく邸では未だ眠てゐるであうらし……それに今頃からその邊を徘徊しては、徒に人の疑を惹くといふものである、その上目の前には灌木が生え擴がつてゐて、其彼方には白楊の森が見える……我ながら感心な事には斯う心に懸る事があつても、獵を爲たいといふ貴とい氣は未だ失せ了つてはゐなかつた、心中で「ひよつとすると、稚鳥に出會るかも知れん——その内には時刻も移らう」。そこで灌木の間へ入つた。けれども、有體を云つて了へば、誠に氣無しに、此道の規則は全然棄て、了つて、歩き散らして、始終犬に目を注げてるのでもなければ、蒼鬱した灌木の傍に來ても、頭の紅いチョールヌイシ名鳥のでもけ

たましい羽音を立て、起つかと思つて、探つて見るでもなく、唯時計ばかり眺めてゐた、何の役にも立たぬ事。さて遂に九時になる「恰ど好い！」と口へ出して云つて、今しも邸へ引返さうとすると、つい傍の雜草の中から、不意に大きなチョールヌイシが飛出した。大した獲物と、其奴を狙撃して、翼下に傷を負せると、鳥は殆く墜ちさうにしたが、夫でも押堪へて、急しく羽敵をしながら、潜るやうに森の方へ飛んで行つて、あはや一端の白楊を飛越さうとして、弱つて、獨樂のやうに回轉つて、茂みの中へ落ちた。かうした獲物を棄て、了ふは勿體ないから、矢庭に踪を追つて、森の中へ駆込んで、チャンカ名犬のを喚けて、二三分も待つてゐると、廳で勢の無いくうくといふ啼聲とぱたくといふ蒼の音がしたが、是は敏捷い犬の足に敷かれて、哀れなチョールヌイシが跳いたのである。さてそのチョールヌイシを拾上げて、囊に納れて、何心なく振返つて見ると其儘——釘付にされたといふ身で、其場に立すくむで了つた……

自分の駈込んだのは極く樹深い霧鬱とした森であつたから、鳥の落た處まで行着くすら容易な事ではなかつたが、其所を少し離れて車路が曲折つてゐて、その路を今例の美人と昨夜自分を乗越したあの男とが馬で靜に連立つて行く、あの男といふのは髭で判つた二人とも黙つて、靜に手を取交して、乗つてゐた馬も二頭とも長い領を美しく伸して、だるさうにほく／＼行く。はつと最初は驚いた……さうさ、驚いたのだ、はつと思つた時の心地は驚いたとより外に言様はない……が、ふと我に復つてきて一心に女を目守た。何様美しかつた！ 目も覺めるばかりの青葉の間を此方へ来るその姿は嬋娟なものである！ 優しい樹影やほんのりした青葉の反映が女の身體を——丈長な鼠色の衣服や、少し傾けた首筋や、淡紅色の顔や、低い帽子の下から美しく漏れ出た艶やかな黒髪の上を靜に這つてゐる。けれども、其面色に顯れた、ほれ／＼とした、物の言はれぬ程にほれ／＼とした、染々嬉しさうな所は、何と言つたら言盡れよう！ 可憐と思ふ心に壓されたかのやうに頸垂れて、半分は

睫毛で隠れた黒眼勝の眼の中を漏まして金色の光を漏してゐたが、その嬉しさうな眼は何處を視てゐるでもなく、唯細眉を冠つてゐる。曖昧な他愛もない微笑——深い喜から出た微笑が口元にほのめいてゐる、見た所では、餘りの嬉しさに力が脱けて、少しぐたりとした氣味で、咲いた花の重みに莖の折れた趣が何處かにある、手も力無さうに、片々は並んで行く男の手の中に、片々は馬の領髪の上に落してゐる。女も熱く視て置いたが、男をも漏さなかつた……これは面相は露西亞人らしくはなかつたが、立派な美男子で、憚る所なく、愉快氣に女を視て樂むでゐたが、見受けた所では、内々自負してゐるらしかつた。畜生、女を眺めて樂んで、大に得々としてゐたが、さのみ感激してゐたとも見えぬ、辱ないと思つてゐたとも見えぬ。はて辱ないと思はねばならぬさ、眞に、自分は何程の者で如何なに美しい心を持つてゐるかも知らぬが、これほど人に慕はれて、こんなに人に悦ばれて耻かしくないといふ者は殆どないものである……實の所、此男が羨しかつた！……その内に

二人の者が鼻の先へ來ると……犬奴が不意に車路へ飛出して吠えつく……女は愕然として、四邊を視廻して、自分の姿を認めるや否や、強く鞭で馬の首筋を撃つたから、馬は鼻嵐を立て、後脚で起つて、兩足を一度に伸ばして、逸散に駈出す。男も直ぐに乗つてゐた驪馬に馬刺輪を加て、駈出したが、それから少し経つて自分が其道を林端へ出た時には、二人は既に野を乗切つて、黄ろく霞む遠方で、品よく拍子を取つて鞍の上に躍りながら行くのが見えた——行くのが見えたが、邸の方角へではなかつた……

見てゐると、二人は臆て薄黒い地平線の上で、鮮に日に照らされたが、それが最後で、其儘岡に隠れて了ふ。自分は恍惚として久らく跡を視てゐたが、臆て徐に森の中へ戻つて來て、手で眼を閉いで、路傍に坐つた。氣を注げて見ると、見識らぬ人に逢つた時は、眼を閉さへすれば、直ぐ其面が見える、偽か真か誰でも市中で試して見れば判ることである。面相を見識つてゐれば居るほど、浮び難くて、其印象

が判然しない、憶出せても目に見えない……自分の顔などは到底も想像せられないもので、細い局部は明亮するが、全體が成立たない。そこで自分は坐つて目を閉つた——すると直と例の女も、同伴の男も、その乗つてゐた馬も、何も彼も全然見え……取分け男の微笑してゐた面が瞭然と見えたから、それをしげく視入ると……その面はもやくとなつて、絳い霧の如うなもの、中に消失せて了ふ、續いて女の面影もふはくと飛んで行く中に、是も亦消失せて了つて、二度と浮ばうとはしなかつた。起上つて心の中で「好いわ。兎に角面だけは見識つて置いた、二人とも判然見て置いた……是から名を聞糺すばかりだ。へツ名を聞糺さうとする！ 唐突も唐突だが随分くだらぬ好奇心ではないか！ とはいふもの、自分は決して好事故心が亢じた譯ではない、唯運命の爲に、かうまで不思議にも強情にも彼人々に突合はされたからは、責めて其身分だけでも、探出さずに置かれぬやうな氣がしたのである、唯それだけの事である。から、最う以前のやうに方角が附かぬとて焦心が

るやうな事はなかつたが、唯何となく心悲しかった——は些と耻かしい……羨ましかつたのであるから……

急いで邸へ往つて見ようとも爲なかつた。それといふも、他人の祕事を許かうとするのが耻かしくなつたからである。それに白晝、面りに情夫情婦を見たので、よし其事は思掛けぬ事奇異な事であつたにしろ——気が休まつたでもないが、何となく熱が冷めた。かうなると最う今迄の事に何も奥妙の所も不可思議の所も無い、果敢ない夢に似た所は無いやうに思はれる……

今迄に心なを込めて、また獵に従事したが、畢意眞の興味はなかつた。稚鳥に出逢つて、一時間半も釣られてゐた……テレーヌの稚鳥は幾ら口笛を鳴らしても相手にならなかつたが、多分鳴らし方も當でなかつたのであらう。最う大分目が長けてから(時計を視れば十二時であつたが)、邸の方角へ向いて、緩々行くと、廳で岡の上に低い家が見える……胸がまた躍出した。近づいて……ルキヤースイチの姿を

見た時には、内々嬉しかつた。ルキヤースイチは例の如く孫屋の側の腰掛に徒爾と腰を掛けてゐるが、門を見れば閉切つてある……住居の窓も其通りで……

まだ遠方から、

「どうだな、老爺——日向ほこりか？」

ルキヤースイチは瘦れた面を此方へ向けて、帽子を脱つたばかりで、黙つてゐる。傍へ往つて、

「どうだい、老爺、好い天気ぢやないか？」と世辭を云つた、些と御機嫌を取つて置かうと思つて。只見ると、昨日の新しい銀貨が未だ落した儘であるから、「如何したんだ知らなかつたのか？」

と叢の中から半分ばかり面を出してゐる銀貨に指さしを爲て見せると、

「知りましねえで。」

「ぢや何故拾はなかつたのだ？」

「何故ちふ事もねえだが、私い錢ぢやねえもんだで、拾ひましなんだ。」

「何故そんな事を云ふよ！」少し狼狽して、銀貨を拾上げて、またルキヤーンヌイチの前へ出して、「まあ是で茶でも喫んでくれ。」

老爺は悠然として微笑しながら、

「難有う御座りまするが、要ましねえ、無くても済むだあ。難有う御座りまする。」

「なんなら、もつと贈ても可いが……」と益々狼狽する。

「何しにね？ かまはつしやりますな——御志は戴きまするけれど、麵包さあ截片ばかりでも多くあるだあ、もし。そればかりでも食切れねえかも知れましねえ——ひよつとすると。」

と起上つて耳門の戸を閉めさうにする。

「一寸待つた、ちよつと」と一所懸命になつて呼留めて、「今日はえらい話嫌ぢやないか？……責めて聞かして呉れ、御主人は——何か、最うお起きなすつたか？」

「起きさつしやりました。」

「而して……御宅か？」

「いんね、御座らつしやりましたねえ。」

「では何處ぞ客にでもお出でなすつたのか？」

「いんね、然うでも御座りましたねえ、莫斯科へ出發つしやりました。」

「如何して莫斯科へ！ 今朝まで此處にお出でなすつたぢやないか？」

「御座らつしやりました。」

「昨夜も此處で？」

「泊らつしやりました。」

「それにお出でなすつた計りぢやないか？」

「御座らした計りでがんすよ。」

「ぢや如何して？」

「莫斯科へ出發つしやつてから、最う一時も経つだんべえ。」
 「莫斯科へ?!」

呆氣に取られてルキヤーンヌイチも面を凝視めた、實に思懸けぬ事である……

ルキヤーンヌイチも亦自分の面を視て、老人は老人らしく、譯ありさうな微笑を、乾いた唇を歪めた所と愁を待った眼の中に湛へた。

「しばらくしてから、」

「令妹も御一所に?。」

「妹子さまも御一所に。」

「では今邸には誰もお出でなさらぬのだな?」

「何方も……」

「此奴人を欺くな。それであんな笑方をするのだ」と思つたから、「おい、老爺。お前に少し頼みたい事があるが、聽いては呉れまいか?」

「どんねえな事でがんすね?」と氣の無さうに云ふ、そろく五月蠅なつて來たといふ様子で。

「邸には、今の話では、何方もお出でなさらんと、如何だ、余に見せて呉れんか? 然うして呉れ、ば、誠に何だが……」

「矢張り御座敷を觀さつしやるだあね?」

「さうさ、座敷を觀るのさ。」

ルキヤーンヌイチは黙つて了つた。が、懸て、

「よろしう御座ります。入らつしやりませ。」

老爺が屈むで耳門の闕を跨いだから、跟に隨いて入つた、餘り廣くも無い立關先を通つて、ゆらつく階を昇ると、老爺が戸を突き開けたが、戸には錠前もなく、唯繩を圈に結んだ奴が鍵の孔から出てゐる……そこで一所に内へ入つた。住居と云つても、天井の低い室が五間か六間あるばかりで、窓覆の間隙を貴さうに漏れる薄

明で見た所では、飾附の道具も甚だ質素な古い物ばかりである。と或る室に（例の園に向いた室であつたが）小形の古ピアノが据附けてあつたから、乾反のした蓋を開けて、壓板を突いて見ると、じうツといふ厭な音がして、氣味わるく鳴止んだ、宛で自分が無禮を加へたとて小言でも言つたやうな鹽梅で。何を見ても、今まで人の居た氣色は見えず、何となく陰々として、噎ほいやうで、人の住居らしくない、唯其邊に轉つてゐる紙屑の純白な所を見れば、未だ棄て、程經た物とも見えぬ。その紙屑を一つ拾上げて見ると、何か書簡の断片と見えて、表には勢の好い女の手で「se taire」の義と書いてあつて、裏には「bonheur」幸といふ文字が讀まれた。窓の傍の圓形の小卓の上には、萎れかゝつた花束を水香に入れたのと、小さな青い紐とが載せてあつたが、紐の方は記念の爲に取つて置いた。老爺は紋紙で張つた小さな戸を開けて、「それ」と指ざしをして、「これがお寢間でがんすよ。此向にまんだ婢室が有るけん

ど、それぎりで最う他にや一室も御座りましねえ。」

さて連立つて廊下を戻つて來ると、錠前の附いてゐる、白ペンキ塗の大戸が見えたから、「彼室は何だ？」と指ざしをすると、

「彼かね？」と老爺は口籠つて、「彼はたゞ……」

「たゞとは？」

「たゞ……物置でがんすよ……」と云つて、玄關へ出さうにする……

「物置？ 見てわるいか？……」

「まあ、旦那さま、そんなえな物見て何になさるだあね？」と不興氣に云ふ、「何が見るもんが有んべえ、靴や、皿小鉢の古えのや……物置でがんすよ、たんだ其切の事でがんすよ……」

「それでも可いから見せて呉れ、頼む、老爺」と云つたが、かう品格を墜しても無理に見ようとするのを内々極り悪く思はぬでもないから、「余は何さ、余もその……」

何しようと思つて……村にこんな家を……」

「耻かしくなつて言切れなかつた。」

老爺は白頭を垂れて立在むだまゝ、何だか變に額越に自分の面を視てゐる。「見せて呉れと云へば」と逼る。

「そんだったら見さつしやりませ」と漸と納得して、鍵を出して、澁々戸を開けた。

そこで物置を覗いて見たが、成程何も眼に立つ物は無い。壁には古びた肖像がいくつも懸けてあつたが、其人物は皆殆ど眞黒な佛頂面で、意地悪さうな眼付をしてゐる。床には道具の破物が轉がつてゐる。

「最う飽足さつしやりましたか？」と無愛想に問く。

「あ、難有うー」と早口に云ふ。

老爺は戸を閉める。自分は玄關へ来て、それから戶外へ出た。

自分を送出しながら、老爺が「靜に往かつしやりませ」と口の中で云つて、孫屋

の方へ往きさうにするから、背後から、

「昨日お出でなすつた女中はあれは如何いふ方だい？ 今日森でお見懸け申した……」

かう突然に問懸けて、狼狽かせて、つい泥を吐かせようと思つたのである。けれども、老爺は低く笑つたばかりで、孫屋へ入つて、戸を閉切つて了つた。

自分はグリーンノエへ歸つて來たが、辱しめられた小兒といふもので、痛く極がわるい。

獨語に「いかんな！ 余には到底も此謎は解けぬものと見える。ちよつ、仕方が

ない！ 最うこれツきり忘れて了はう。」

それから一時間もして、持村へ歸つて來た、不機嫌な面をして憤々しながら。

一週間経つた。例の女の事、その同伴の男の事、また自分が此人々に邂逅つた事を如何に忘れようとしても——晝食後の蠅といふもので、拂へば又來て、うるさく纏綿つてならなかつた……ルキヤースイチも亦例の仔細あり氣な眼付に、控へめな

物の言振で、淋しい哀れほい微笑をして絶えず懐に浮ぶ。家までが、其事を憶出すと、閉めかけた窓覆の隙間から、家内の様子をほのめかして、宛で「結局何も判るまいがな」と云つて、人を嘲弄すやうに思はれる。耐へかねて一日、天氣の好い日であつたが、グリーンノエへ往つて、其所から徒歩で……何處へ往つたか、いふまでもないこと。

例の由あり氣な邸が近くなつた時には、實の所、随分烈しく胸が騒いだ。見た所では、家の體相に些とも變はなく、矢張窓は閉切つた儘で、哀れな孤兒みるやうな鹽梅である、唯孫屋の前の腰掛には、ルキヤーマイチの代りに、赤いシャツに木綿のカフタンの長袴を着た、二十歳ばかりの、若い、僕らしい男が腰を掛けて、蓬々とした頭を手で支へて、坐睡りをしてゐるが、をりく、顛倒かけては愕然として飛び上る。

「お早う！」

と大きな聲で言葉を掛けると、其男は急に跳起きて、眼をきよとくさせて自分の面を視た。

「お早う！」とまた云つて、「老爺は如何した？」

「老爺さまちふは？」と徐々いふ。

「ルキヤーマイチさ。」

「あ、ルキヤーマイチでがんすか！」と餘所を顧いて、「ルキヤーマイチに何ぞ用でも御座らつしやるだあね？」

「然うだ、少しルキヤーマイチに。家か？」

「い……いんね」と吃つて、「ルキヤーマイチは……その……何ちうたら可かんべえ……」

「病氣なのか？」

「いんね。」

「ぢや如何したんだ？」

「ルキヤーンイチは最う居りましたねえ。」

「如何して？」

「如何してちふこともねえだが、えら珍事ちふやうの事へえ有りましたつけえ。」

「死んだのか？」と愕然とする。

「首い縊つておつ死にましたあ」と小聲になつて答へる。

「首を縊つて？」と吃驚して大聲を揚げて手を拍つ。

「首い縊つて。」

黙つて了つて、唯互に面を視合はしてゐた。

「最う餘程になるか？」と臆て自分が口を開くと、

「今日で五日になるだ。葬禮は昨日出しましたあ。」

「なんで首なんぞ縊つたんだらう？」

「から解りましたねえ。一本立でよ、耕奴にあらお手當のう戴えて、不自由ちふ事些とも知んねえで、旦那様方にや親族の者のやうに愛へがられて居つた、私らにや旦那が有るでがんすよ——達者で御座らつしやりませ、露國の農夫は遠く離れ居る者のとをい何ちふ事だか、から解りましたねえ。だから大方死神様のう取付かしつたんべえツていひますことよ。」

「如何して縊つたらう？」

「如何してちふ事もねえだが、つい縊りましたあだ。」

「以前からそんな様子でもあつたのか？」

「さあればね……何も是れつちうて……その……有りましたよ。不慮からえら陰氣な人で。あぢよ云つても眞にしねえだ。はあすうくばつか云うて、つまんねえちて。年齢も年齢だあからね。死ぬべえちふ前から始終何だか考へ出した。たまにや私等が所へも遊びに來ましたつけえ、村さあ、私い甥に當るもんだあからね。」

「イヤよ。我あ所へ泊りに来ねえか？」ていふから、「何故や、叔父さあ？」「何故ちうて、何だか恐れえだ、一人ぢや淋しいと思へ」。そいで私い泊りに来よりましつえ。泊りに来て見ると、叔父貴い時々戸外へ出て、母屋あ眺めて、こんねえにして眺めてよ、首い打振つて、溜息のう吐きをる事も有りましつえ……死ねべえちふ前の日も、晩氣に私い所へ呼ばりに来たもんだで、私い泊りに来た。あ。一所に孫屋さあ来ると、叔父貴い些とんべえ腰掛に腰よ掛けちよつたつえ、ついと起つて出て行つたあから、私い待ちよつたけど、えら手間あ取れるもんだで、戸外へ出て呼ばつて見た、「叔父さあよ！ 叔父さあ？」ちて。返辭いしねえ。はあてな、何處へ行かしたんべえ、母屋ぢや有んめえか、ちて往きて見ましたあ。最う暗くなつて来た。あ。物置の傍あ通ると、戸の彼方で、あんだか知んねえが、がりくちうたから、戸べえ開けて見ると、叔父貴い、窓の下だつてえ、ぶつ躡踞ぢよる。「叔父さあ、あぢよ爲ちよるだあね？」ちたら、叔父貴い突と此方に向いて、私い叱りつけ

た、眼玉あきよろくして、猫の眼玉見たように打光つちよる。「あんだちて来た？ 面あ刺つちよるが我え眼に入らねえか？」ちた。この聲がえら驚嘆れちよつたことよ。そりよ聞くと、私い身の毛え彌立つた、何故だか知んねえが、恐ろしくなつ来た……大方そんな時から最う死神様のう取付いて御座らしたんだんべえさ。「闇中でや？」ちたが、膝は震へに震へるだ。「あんでも可から、何方い往つちよれ」、ちた。私い此方い来ると、叔父貴も物置のう出て来て、鎖べえ卸した。それから一所に孫屋さあ来て、私い始めて蘇生つたやうな氣持いしました。そいでまた「物置で何よ爲て御座つた？ ね？」ちて聞いたら、叔父貴い狼狽して、「黙つちよれ。饒舌るな」、ちて臥煖爐へ上くつて臥つたあから、私い考へた、「話し爲ねえ方が可かんべえ。叔父さあ今日は何だか常でねえ、大方氣色でも悪いだんべえ」。そこで私も臥煖爐へ上くつて了りました。燈火は隅の所に點いちよる。私い横臥つて、うつらうつらしちよつたと思ひなさろ……しると、ふいに戸がすうツ……ちて開いた、些

とんべえ。叔父貴い戸を背にして臥ちよつたに、知んなさつて、あろが、些とんべえ耳が遠いだ。それだのによ、ふつと飛起きて、「誰だあ、我あ呼ばつたなあ、あゝ？誰だあ？はあてな、お迎が来たゝあな、お迎が！」ちて、帽子も冠らねえで、出て往つた……「何よ爲ちよるだんべえ？」と思へながら、私はあ濟まねえこんだがつい其儘眠つ了ひましたあモシ……翌朝になつて眼べえ覺して見ると……叔父貴い居ねえ。戸外さあ出て呼つて見たが、何處にも居ねえ。門番の所さあ往ぎて、「叔父さあ出て行くを汝え見なんだか？」ちて聞くと、「うんにや、知んねえ、ちふうはあてな、様子可異ぞよ……」「あんだちて？」私等二人とも慄然とした。「往ぎて見べえフエドセイチの名、門番、母屋ぢや有んめえか、往ぎて見べえ、ちたら、「往ぎて見べえ、ワシーリー、チモフェイチの名」、ちたが、其の癖彼え面あ壁土のやうに純白になつちよるだ。二人で母屋さあ往ぎました……私い物置の前を通りながら、見ると、健い全で外れちよる、戸をこづいて見ると、戸べえ内から締がしちある……フエドセイチ

い直ぐ窓のある方へ廻つて覗いて見たつけえ、大え聲で、「ワシーリー、チモフェイチ！足が垂下つちよるよ、足があ……」ちたから、私い窓の方さあ往ぎて見たら、其足あ叔父貴の足だつたと思ひなさる。室の中央で縊りましたあだ……それから御檢視のう願つて、縄さあ外して見たら、結目え十二べえ有りましつけえ。」

「それで檢視は如何した？」

「如何しますべえ。唯えら考へたゝ、何故だんべえちて。さあ解んねえそれだもんだで、大方氣べえ違つたんだんべえちふ事になりましたあ。死ぬべえちふ前ごろにや、頭が痛めてなんねえつて、始終ぐづぐづ云つちよりましつけえ。」

それから尙ほ半時ばかりも談話をして、若者とは遂に分れて了つたが、變な心地がした。實の所、此古家を見ると、妄信ではあらうけれど、内々薄氣味悪く思はぬ譯に行かなかつた、尤も一ヶ月経つて持村を去つてからは、此厭な談も、不思議な邂逅も次第々々に記憶を脱出て了つた。

(306)

三年経つた。其間は大抵彼得堡でなければ外國にのみ居たし、それに田舎へ歸つても、永くは居なかつたので、グリーンノエへも、ミハイロフスロエへも、一度も往かなかつた。また例の美人も、彼の男も、其限りで何處でも見掛けたことはなかつた。尤も三年目の末の事であつたが、一日莫斯科の去る知己の家で、シルイコーヴァと妹のペラゲーヤ、バダーエヴァに——凡夫の悲しさには、其時まで未だ虚構の人物とのみ思つて居た、そのペラゲーヤに出逢つた。姉妹とも最う若くは無かつたが、なかく人好のする風で、談話をさせても、愚な事を云はぬのみか、快活くて、面白、大分旅行したと見えるが、また爲たゞけのものはあつて、人に接する工合が自と快活である。けれども、例の女と此人達とを較べて見れば、何處さら似寄の所はない。紹介をして貰つて、姉のシルイコーヴァと（妹の方は何處からか來た見識

らぬ地質學者と談話をして居たので）シルイコーヴァと談話を始めて、某縣では隣同志だと告げると、

「あ、眞に彼所に少しばかり地面が有りましたつけ——グリーンノエの傍に。」

「知つてゐます。ミハイロフスコエでせう？ 知つてゐますとも。時にはお出になりますか？」

「私？ 稀に。」

「三年前にお出なさりはしませんでしたか？」

「待つて頂戴よ。たしか、参りました。さうく、参りましたとも。」

「令妹と御一所でしたか、或は御一人でしたか？」

「後家どのちろりと吾の面を見て、

「妹と一所に。一週間ばかり居りました。矢張用事が御座いましてね。けれども、何方にも御目には懸りませんでしたよ。」

(307)

「さあ……あの邊にはあまり御交際なさるやうなものも有りませんね。」

「然うですよ、餘り御座いませんよ。それに私は御近所の交際が甚い嫌だもんですから。」

「あの、何でしたかね、たしか其年に不幸な事が有りましたつけね、ルキヤーヌイチが……」

シルイコーヴァは忽ち目を濕ませて、

「貴君は彼を御存じでしたか？」と乗地になつて、「誠にひよんな事で。あんなに氣質の善い老人でしたが……それも、貴君、原因も理由もなく……」

「然うださうですね。實にとんだ事でした。」

妹のペラゲーヤが側へやつて來た。先程から地質學者にウオルガの岸の地質の講釋を聞かせられてゐるが、最う可厭なつたものと見える。

と見て姉が、「ちよいと、Pauline。あの Mr は此方ルキヤーヌイチを御存じだと

さ。

「おや、然うですか。慙然な事をしましたつけ。」

「三年前に貴嬢はミハイロフスコエへお出なすつたでせう、あの時分私は屢次彼邊へ遊獵に往きました。」

「私が？」と少し怪訝な面をする。

「然うさ、當然さ！」と姉が急に横鎗を入れて、「おや、覚えてゐないの？」と凝と妹の眼の邊を諦視る。

ふいにペラゲーヤが、「あ、さうく……然うでしたつけ！」

自分は心中で、「へん、如何だつたか。」

「ね、ペラゲーヤ、フォードロヅナ、何ぞ一ツ聞かせて下さらんか？」と突然言出したのは白つほい光澤のある前髪を鶏冠のやうに立てた、甘たるい曇眼の、脊の高、若い男である。

「然うですねえ」と生娘は躊躇する。

「貴嬢は唱歌を爲さるか？」と自分は鋭く云つて、急に起上つて、「どうぞ……是非、何ぞ一ツ。」

「何をね、貴君？」

力て平氣な無頓着な風で、「伊太利歌で…… Passa que colli, といふ文句で始まる歌があるが、御存じでせう？」

「存じてをります」と誠に邪氣なく云つて、「それが好う御座んすの？ 唱つて見ませう。」

とピアノに對つた。自分は、ハムレットの格で、姉のシルイコーヴァに目を注いでゐた。シルイコーヴァは始めてピアノの音がした時には、少し慄然としたやうであつたが、それでも終まで平氣で聽いてゐた。バダーエヴァはなかく巧く唱つたので、歌曲が關むと、例の喝采が響き渡る。最う一ツ何かと言出したが、姉妹の者は目を視

合せて間もなく歸つて了つた。二人が、座舗を出る時に、importun 折がわる と言つたのが聞えたから、「當然さ！」と自分は思つたが——それぎりで最う姉妹の者には逢はなかつた。

それから一年経つた後の話であるが、自分が彼得堡へ引移つて彼此する内に、冬になつて假面舞踏會が始まつた。或晩、十一時ごろに、さる親友の所を出て歸宅らうとしたが、如何にも氣色が悪かつたので、貴族俱樂部の假面舞踏會へ往つて見た。氣を注げて見ると、相應に品格の有る者がこんな所へ來ると、如何いふものだが、温順さうでゐる薄氣味の悪い顔色をするものであるが、自分も然ういふ顔色をして、久らく圓柱に沿いて、姿見の側を徘徊してゐると、をりく怪し氣なレースを着けて古ぼけた手袋を穿めたドーミノに着る衣裳連か附隨から、そんな時には串戲で紛らしてやる、其位だから此方からは滅多に話懸もせず、久らく耳を吠えるやうな喇叭の響や、唸るやうな胡弓の音に假してゐるが、遂に退窟し盡して、頭痛

(312)

を備けて、今しも宿所へ歸らうと……し……て……見合せた。只言れば、黒い衣裳を着けた女が圓柱に靠着てゐる。それを見て、停止して、傍へ往つて……宛で譚のやうだが……直ぐそれと知れた、例の女だと。如何して知れたか、女が假面の細長い孔から氣の無さうに自分を視た、その眼付でか、腕や肩の美しい肉付でか、姿に格別に女らしく氣高い所があつたのでか、それとも亦自分の心の底で不圖一種の聲がしたのでか——何とも言ひかねるが、兎に角それと知れた。胸を躍らしながら、幾回か傍を通つて見た。女は身動をも爲なかつたが、その靠着てゐる所に如何にも落膽したといふ趣があつたので、それを見ると、ふと

Soy un cuadro de tristeza,
Arinado a la pared.

(吾は壁に寄せかけたる哀なる畫ぞとなり)

といふ西班牙の奇異譚の二句が胸に浮んだ。

女の靠れてゐる圓柱の後へ廻つて、その耳の所へ口を寄せて、小聲で、

Passa que' colli……

といふと、女は急に此方を振り向いた。眼と眼とびつたり出會つたので、女が驚いて眸子を擴げてゐるのまでが分つた。曖昧な手附をして片手を出して、不審さうに自分を視てゐる。

自分は女を凝視たまゝ、落着いた聲で、「何年の五月六日の夜の十時ごろ、ソルレントの della croce 町で、それから露西亞では、何縣のミハイロフスコエ村で、何年の七月二十二日に……」

と佛語で云つた。すると女はたゞしくとなつて、吃驚した眼付で、足の爪頭から頭の天邊まで自分を視廻して、「Venez」の義と小聲で云つて、身軽く座敷を出て行くから、自分も跟に隨いて往つた。

雙方とも無言であつたが、此女と比肩で行く時の自分の心地は到底も筆には書盡

(313)

くされぬ。面白い夢がふと現實となつたと謂はうか……垂死たビグマリオンの目の前へ、ガラテイヤの像が活きた女と化つて、臺座を下りて來たと謂はうか……宛然夢のやうで、息氣も塞りさうだ。

共に幾間となく通過ぎて、と或る一間へ來ると、女は窓の側の餘り大きくもない長椅子の前で停歩て、腰を掛けたから、自分も其側に腰を掛けると、

女は徐に面を此方へ向けて、しげく自分を視めて、

「貴君は……貴君は「彼人」に頼まれたのですか？」

と云つたが、勢の無い、おろく聲であつた。

問はれて、少し狼狽して、吃りながら、

「いや……頼まれたのではないのです。」

「では彼人を御存じなのですか？」

「知つてはります」と理ありさうに答へた、化課せて見たくなつて、「知つてはるま

す。」

女は烏散さうに自分を眺めて、何か言ひさうにして、言ひかねてゐる。

「貴女はソルレントで彼男を忍ばせた事が有る。それからミハイロフスコエでは婿を爲つた事も有るし、馬で一所にお出なすつた事もある……」

「如何してそれを……」

といひかける。

「ちやんと知つてゐます……何も彼も知つてゐます……」

「お顔が何だか見覺が有るやうだけれども……いゝえ、然うぢやない……」

「でせう。私はまだ御存じない筈だ。」

「ではかうして如何しようと仰しやるの？」

「ちやんと知つてゐます。」

旨く端緒が開いたから、此機會を外さず斬込まなくては可かぬ事も、ちやんと知

つてゐますの、何も彼も知つてゐますのと、いつまでも一ツ事ばかり言つてゐるのは最う可笑しくなつた事も、能く承知してゐたが——何分おそろしく胸が騒ぐに、思ひがけず邂逅つて痛く狼狽して、動顛して了つたので、是より外には何さら言得なかつた。それに實際最う何も知つてゐない。漸々馬鹿じみて来る、初は此女にも萬事見徹の不思議な人物とも思はれたらうが、それが急に何を言つてもにや〜笑つてゐる白痴になりだす、とさ自分でも心附いてゐたが……如何も仕様がな。

「何も彼も知つてゐます」と最う一遍口の中でぐづく〜と言つて見た。

女はちろりと自分の面を視て、急に起上つて行かうとした。

是れは又餘り酷い！ 自分は其手を控へて、

「何卒最う少し下に居て下さい、御話し申したい事が有るから。」

女は思案して又腰を掛けた。

自分は熱心になつて、「只今私は何も彼も承知してゐる様に申しましたが、あれ

は實は虚言です。なあに、何も知つてはゐません、貴女は何人だか、彼方は如何いふ方だか、知つてはゐませんが、けれども、不思議な事で、宛で誰かに弄られたやうな氣持がしますが、二度貴女方を御見懸け申した、而も其場合がいつも同じやうな場合で、見る氣もなかつたが、つい貴女方の或は祕して置きたくお思ひなされる所を見たものですから、それで今も圓柱の傍であゝ云つて貴女を驚かしたのです。」

と云つてそれから、ソルレントで見懸けた事も、露西亞で出逢つた事も、ミハイロフスコエで聞糺しても本意を遂げなかつた事も、莫斯科でシルイコーヴァ姉妹の者と談話をした事も、少しも、包み隠さず、悉皆話して了つて、

「是切の事です。貴女の爲めに私がどんなに深い強い感じを起したかは申しますまい。貴女を見て平氣でゐると云つても、そりや出来ない相談だ。それに、その感じは如何な感じてあつたか、それをお話し申す必要もない。貴女をお見懸け申した其場合の事を考へて見れば、善く判る事です……私だつて永までも愚癡らぬ希望を

抱てるるやうな者でもないが、然し今日といふ今日は實に何とも謂はれん心地になつた、お察し下さい。けれども、假令ひ僅の間でも、貴女の注意を惹かうして、都合な事を言つたのは濟まなかつた、お謝罪をします。」

女は首垂れて、文もない辯解を聞いてゐるが、臆て、

「それで貴君は如何しようと思はれるんです？」

「私ですか？ 如何するも斯うするもない……最う是で十分なのです……他人の秘密は貴重します。」

「然うですか？ それでも今まで貴君は……」と言ひかけたが、氣を改へて「然し御無理は御座いませんよ。何人でも貴君の位地にお出なすつたら、矢張然う爲さるでせう。それに不思議な事でかう數次お目に懸つて見れば……まんざら御縁が無いでもなし。聽いて戴きませう、世間には随分氣の知れない方も有つたもので、御自分不都合だからと云つて、初て逢つた方に愚癡を漏したいばかりで、こんな舞踏

會なんぞへお出でなさる方も有るさうですが、私はさういふ者では有りません……さういふ方には他人の同感が必要なんでせうが、私は何人にも同感して戴きたくない。私の心は謂はゞ死んで了つたやうなものですから、今夜此所へ參つたのも、その結局を全然付けて了ひたいばかりで。」

とハンケチを口へ加がつて、小し言へないのを無理にといふ氣味で、

「と申したからつて、能く有る假面舞踏會の線言と思召さないやうに。私は今そんな氣樂ぢや有りません……」

成程其聲を聞くと、人の魂を奪ふ程の優しみを有つてゐる中にも、何處か人を慄然とさせる所が有る。

女は今まで佛蘭西語で話してゐるが、更に露西亞語で、

「私は露西亞の者ですよ、その癖此地に居たことは餘り有りませんけれど……名前はお聞きなさらずともこの事だから、申しますまい。アンナ、フォードロヴナはコルグ

アをば舊い知己ですから、あの方の妹の積りで、仰しやる通り、ミハイロフスコエへ参つたことも有ります……その頃は未だ公で逢ふことが出来なかつたので……それでなくても、世間では最う彼此影口を聞きだして……それにまだ故障があつて——彼人も係累が有つたもんですから……其後故障は無くなりましたが……先の名前を其儘私のに爲ようと思つてゐた、貴君が連立つて行くのを見懸けたと仰しやる、彼人は私を見棄て、了ひました。」

と手眞似をして、黙つて了つたが、

「眞個に貴君は御存じでないの、御逢なすつたことは有りませんか？」

「一度も有りません。」

「彼人は彼時から始終外國にばかり居ました。尤も今は此地ですが……これが私の經歷、——ね、何も不思議な事はありますまい、世間並で。」

「ソルレントでは？」

とおづくいふと、

「ソルレントでは始めて知己になりましたの。」

と落着いて云つて、而してぢつと考へ込むだ。

自分も黙つて了つたが、をかしく氣怯れがする。傍に坐つてゐる女はその姿が數次目前に隠現いた、そのためには苦しいと思ふ程思ひ亂れて焦燥した、その女である、——と思へば、おそろしいやうな、苦しいやうな、妙な心地がする。固よりかう邂逅つたからとて、それで如何なるといふ事はない。彼我の間には大した隔たりのある、今別れ、ば、最うこれが永の別となるのである。女は首を延して、兩手を膝に落して、氣なしに平氣で坐つてゐるが、その氣なしも、平氣も、皆遺瀨のな悲しさ、取返しのならぬ薄命から出たものである！ 假面を蒙つた者が二人づゝ連立つて、前を通る、「一ツ調子ばかり繰返してゐる、馬鹿々々しい」ワリスの調が或は奥深く籠つても聞えれば、亦は烈しく物の破裂するやうに近々とも聞える、そ

の浮いた音色を聴いてゐると、坐に胸が騒いで、果敢なくも辛くも感ぜられた。心中で「これがいつぞや遠い田舎の小家の窓から首を出して、時を得顔に美に誇つてゐた彼女であらうか? ……」と思つた。けれども時は此女を避けて通つたと見えて、假面のレースに隠れなかつた顔の邊を見ると、小兒の面のやうにむつちりしてゐる、たゞ總身は冷固つて、宛然像を見るやうだ……ガラテイヤは臺座に戻つて了つて、最う降りさうにもない。

ふと女は起直つて、彼方の座敷を見遣つたが、突と起上つて、

「お手を拜借。早く彼方へ行きませう、早く。」

連立つて廣間へ戻つたが、自分が辛うじて追付くほど、女は足疾であつた。とある圓柱の傍で立止つて、小聲で、

「此處で待つてゐませう。」

「何人かお尋ねなされるんですか?」

と云つたが、女は最う自分の云ふ事などは耳にも掛けず、喰付くやうな眼付で、ちつと群聚を凝視した。黒眼勝な大きな眼で、黒天鷲絨の蔭から睨むだ所は凄いやうである。

女の凝視めた方を振向いて見て、全然解つた。圓柱の列と壁とで廊下のやうになつた所を、森で女と連立つて行くのを見掛けた、あの男が通つて来る。殆ど變らなかつたから、直ぐそれと知れた。矢張美しい茶褐色の髭を捻上げて、沈着いた自信の厚さうな鶯色の眼を面白さうに光らせてゐる。緩りくと歩きながら、すらりとした體を少し屈めて、連の衣裳を着た女に何か物を云つてゐるが、自分共の前へ來ると、ふと面を擧げて、初は自分の面を視て、それから並んで立つてゐる女に目を轉して、眼でそれと知つたか、すこし眉を動かした、——而して辨るか辨らぬ程の、とは云へ我慢のならぬ程無禮な、冷笑を帯びて唇を引歪めて、少し屈むで、連の女の耳を嗅いで、何か二言ばかり囁くと、女は急に振返つて、青い眼で急しく自分

奇遇

共を視廻して、頓て忍びやかに笑つて、可愛らしい手で男を嚇した。男は片々の肩を一寸聳かす、女は厭らしく寄添つた……

此方のを振向いて視ると、通り過ぎる男女の者を目送つてゐたが、其内に矢庭に自分と組合してゐた手を振解いて、急足に戸口の方へ行く。自分も跟に随いて行かうとしたが、女が振返つて凝然と面を視たので、低く頭を垂けて、其所に立止つて了つた、——蹤を追ふのは無禮でもあるし、また馬鹿氣てもゐると心附いて。

二十分許してから、自分の親友の彼得堡の活きた人名録と謂はれる男に、「君に聞きたい事がある、あの髭を生やした、脊の高い好男子は、あれは何者だらう？」

「あれか？ あれは何處か外國の者だ、此國では餘り見掛けたことがないが、烏散な奴さ。何故？」

「なに、只一寸……」
それで自分も歸宅つて了つて、最う女には何處でも邂逅はなかつた。戀人の名を

聞いたからは、女の身分も聞出されもしたらうが、最うそんな事も爲たくなかつた。前にも云つた通、此女は幻の如に現れたが——また幻のやうに傍を摺抜けて永く消え失せて了つた。

奇遇

二 狂人 (ヨリキイ)

職に離れた田舎教師のキリール、イワーノウキチ、ヤロスラーフツェフは卓子に肘を持たせ、両手で頤頤を確と壓へ、前に散らけた統計表を茫然諦視て、さて此四角な紙を如何したものかと、散々使つて草臥れた脳髓から、此智慧一ツ絞り出さうと試みた。

が、どうも旨く行かない。頭の中で、籠つた音に、何かざわつく。何でも重みのある濁つた物が一杯詰つてゐて、其が内部から頻に眼を壓して、無理無體に外へ押出さうとしてゐるやうだ。數字が表を脱けて、忽ち消えるかとすれば、又現れて、何だか知らぬが、味も卒氣もなく冷然と示してゐる。或は覺まつては、細かいく曖昧な矚り書の文字のやうなものになり、又は忽ちバツと擴がつては、變な瘦削けた物の形になる。この數字の出沒變幻するのを視てゐると、何處か心の底の方か

ら惱ましい騒々しい思想が勃々と浮び出て、次第に凝固りさうで、まだ正體は何とも分らぬが、いづれ是は表面へ出て來るに違ひない。此奴が出て來たとなつたら、その辛さ苦しさは、中々今のやうなものではないと思はれる。

(329)

近來は此厄介な思想に困しめられることが日を経るに随つて愈々頻繁になる。これが秋の雲のやうに冷たく濕潤と、一切を薄暗くして、其の去つた跡には憂鬱と腑の脱けたやうな冷淡な心持が微のやうに靈性を蔽ふ。で、此思想が纏つて意識に上る迄には大分手間取れるが、其處に何やら免れ難い因縁でもあるやうに、如何なる場合に、如何なる手段を用ひても、曾て其發展を妨げることが出來ぬ。衝と起つてみる、部屋を歩いてみる、歌を唱つてみる、知人を訪うてみる、種々な事をやつてみるが、此思想が歌ふ聲を消壓し、何處へ行つても跟を隨けて來て、片時も側を離れぬ。

初の内は根氣よく之と闘つてみた。が、闘へば疲れるばかりで何の役にも立たぬ

のみか、怒じ反抗すれば、反て渾沌たるものに眼鼻が付き、劃然際立つて来て、一段と心を壓迫するようになる。そこで最う反抗せぬことにして、其影が射すと、卒然長椅子に寝轉んで、頭の下に兩手を敷い、四も五も言はず其自由に成つて了ふようにした。

かうして二時間、三時間、時とすると一夜を過すことがある。其間は何の事はな
い人間が二ツに割れたやうなもので、時の經つに隨ひ次第に小さくなる一方が、例
の思想に惱まされる一方を、情なさうに便りなげに諦視てゐる中に、その惱まし
い思想が人生の光明とも花とも見るべき、凡そ空想の生む一切のものを、確でッも
搗いたやうに、微塵に砕いて、何の色香もない、舌を刺すやうな味の物にしてさふ。
凝と天井を諦視て、我心臓の鼓動の音を聴き、貸間主のお神様の部屋でボン／＼
時計の振子の動く音に耳を澄してゐると、コト／＼／＼と振子が拍子を取つて鳴つ
てゐる。安心決定して何の疑ふ所もなく斯うコト／＼とやつてゐるのを聴いてゐる

と、其に巻込まれて自分も何とやら徒に物を思ふのでは無いやうな氣がする。兎角
する中に何時しか物思にも慣れて了ひ、唯其影の射す時に何となく怖けるだけで、
それも屈託にかまけて了へば何とも思はぬが、其事が果てれば又舊に復つて、影が
射せば矢張怖ろしい。

が聽てその怖ろしさが別様の形式を取つて、心配となつて現はれて來るようにな
る。かうなると何事か起りさうで、それが氣になつて片時も忘れられず、くさく
さして了ふ。それが亢じて、その怖い事の起るのを一心不亂に待つようになる。
と、もう何か鬼のやうな者が今にもものさばり出て、長椅子の側に衝立ち、無氣味な
身振をしつゝ、恐ろしい權幕で、

「お主が何を考へてをるか、乃公はチャンと知つとるぞよ。知つとるとも、何事も
此方見徹しぢや。お主の脳髓が何處で何分曲つとるといふ事までチャンと知つとる。
お主のやうな生活に嵌らん、生活から弾き出されたやうな人間が其様な大それた事

を考へるとは、身の程を知らん話ぢや。こら、何で其様な真似をするのぢや？ 其様な真似をすると、斯うするぞよ……」と其罰として見すべき憂目、それを仕方では爲て見せる。

こんな事を想像しながら、縮み上つて、情なさうに入口を視返へる。

入口の戸は薄べらな脆弱い出来で、加之も掛金は針金だ。者奴は萬事見徹しだといふに、そのお見舞ひを此様な物では防げぬ、いや、如何な物でも防げる筈がない、譬へば煉瓦の壁なりとも、スツと其中を抜けて来る奴だ。であるから、之を待つ身になつては、ゴトリといふにも悔として、知らぬ人さへ見れば、胡散さうに其舉動に注意してハラ／＼する。けれども辛氣な物思は度重なれば益々募つて愈々身に附纏ふ。今一息で之に頭から丸呑にされるかも知れぬ……と思ふと、何やら眞黒けな慄然とする程凄惨い物に行當つたやうな心持がして、と胸を突く。

「如何したら此苦患を遁れよう？」

と稍機嫌の好い時には自問して、かう自答する、

「手向ひせぬに限る。全然身を任せて了つたら、反て何とも感じなく成るだらう。」
で、此時も例に依つて長椅子に寝轉ばうとすると、忽ち倉皇しく背後の戸を開放つて、ツカ／＼と人の入つて来る氣色がして、草臥れた聲で、

「や、居たな！ 漸く一人だけ見付けた……やれ／＼！」

椅子ながら振返つて見ると、統計局出仕の一知己で、役所では此人の事を半低音君と譯名を呼ぶ。半低音君は椅子に就いて、片手に白の帽子を提げたまゝ、片手で額に玉なす汗を拭つた。顔色蒼褪めて且つ寝れ、眼中は血走り、見た所如何にもガツカリした體である。

主人のヤロスラーフツエフは客の側へ寄つて、怡々と、其辭黙つて凝と其手を握つた。此人が来たばかりで、例の物思ひに襲はるゝのを免れ得た。

「暑い中を狂人のやうに飛廻つたが、皆留守さ」と半低音君、實の名はピョートル、

ワシーリエウキチ、バブキンが不平さうに口元を引歪めて言つて、さて目を瞑つて、その上を指の腹でわなくと擦るところは、睫毛に何か付いてるのを拂ふやうな手附だ。

「誰を捜して歩いたの？」

と聞かうとする、その先を越して、

「かういふ譯だ……が、何だよ譯を聞いてから厭だ何ぞと言ひツこなしたよ。僕あ最う到底も堪へん。二晩打通して介抱したんだもの。もうゲンナリした。リヤホフや何かは實に酷い……だつて、譯を言はなきや分るまいが、何さ……それ、何さ……え、と、あれは……クラフツオフ！ クラフツオフがね、君氣違ひに爲つたのだ、もう三日になる。何だか譯の分らんことを、や、饒舌るく！ しかし、時とすると夢中で言ふのでも無さうな、至極氣の利いた事をも言ふ。

それで何さ……僕は二日間打通して介抱やつたんだ。もう此上は御免を蒙むる。非

常に疲れた。病人は逆らふと氣が暴くなつて、喧嘩を吹ツかけるが、といつて放つとく譯にも行かん。途方もない事を行らかすからね。靴墨で壁を塗り出すしさ、赤裸になつてブラシで胸を擦るね、何でも大聖人の積りか何かで衝突つて來るんだから、吹出したくもなるが、目も當てられない……尤もウンザリもするがね。醫者は見舞つて呉れる。病院へ入れようといふので今運動中だが、此奴が中々右から左へと運ばん。兎に角皆が腹の立つ程形式に流れて了つて、人間らしい所が少しも無いんだ。見舞ひに來たつて、戸の隙間から一寸面を出して、少しばかり同情を表して置いて、而して歸つて了ふんだ。皆暇が無い、何かしら用が有る。僕は最う到底も辛抱が出來んと思ひ玉へ。君一ツ行つて呉れんか？ え？ 今はルイジンが附いてるのだ。そりや君はクラフツオフとは餘り懇意ではない、そりや僕も承知だが、其様な事は君如何だつて好いやねえ？ ねえ、君、然うだらう！ 行つて呉れるだらうね？」

「さう……無論、そりや、何だ、そりや、行かう。何なら是から直ぐでも何だが……」
と、しかしあまり逸んだ様子でもなかつたが。

「その事……」直ぐに限るよ」と容は狼狽て其言葉に絶つて、もう退引させず、
而して説明までする。「實はね、ルイジンは二時間程経つたら交代する約束で、辛と
承知させて来たんだから、然うして貰へると頗る好都合だ。ぢや、行つて呉れ玉へ！
なに君は健康だから、然う難儀なことはあるまい。こんな事なら、先刻のツけに君
の處へ駆付けりや好かつた。氣が附かなかつた。さうすりや、此様にへトくにな
るんぢやなかつたものを……ぢや行つて呉れるね？」

「よろしい……一緒に出懸けよう。」

半低音君は起上つて、ボンと無造作に帽子を冠つてから、一寸その恰好を直して
戸を開けかけて振返つて視ると、ヤロスラーフツエフは下唇を噛むで凝と出て行く
友の足元に目を附けて、考へく遅々外套を被にかゝる所であつたが、此方は委細

構はず、

「お、さうだッけ……君は彼男の下宿を知つてたね？ ぢや、君一人で行つて呉
れんか、僕は是から直ぐ家へ歸るから。ね、よろしいか？ 難有いッ！ そりや、
君何だぜ、僕は本當に……」

後は戸口で言つたので、キイと齒の浮くやうな戸の軋み音に消されて、聞えな
かつた。この戸の軋む音を聞くと、ヤロスラーフツエフは恟々と震ひ上つて、苦い面を
して、椅子の上へ腰を落して了つた。悲しい報知で頽然氣落がして了つて、もう立
つてはゐられなくなつたので。

クラフツォフと聞いて目の前に浮ぶのは、中脊の干乾びたやうに骨張つた、黒い
髭の能く動く、扁桃状で黒目勝の、燃ゆるが如きキヨロく眼の男であるが、その
色白の皺だらけの額を濃き眉の上下に動くことは凄じいもので、釣上つては剛い逆
け髪に逼らんとし、垂れては眼窩を没せんとする。時とする話をしながら、左の

細長い指先で、同じく左の眉を壓へて動かさぬことがある。其時は右の眉だけ釣上つて、面が歪になり、身を細うして何人も到り得ぬ境に深く入込み、何人にも掴めぬものを掴まうと氣張つたやうな、苦しきやうな、鋭い面相になる、而して眼中には鋭どき光を持ち、悲しさうな、嬉しさうな、切なさうな色を一掃淨べる。

久しい前から精神に異状があるやうに噂せられて、成程然うかと思はれる事が毎日のやうにある。例へば今日天文の蘊奥を極めん爲め數學を研究したいと言ふかと思へば、明日は田舎へ引込んで心の平和を恢復したいの、亞米利加へ行つて、牛羊の群を遂ひつゝ、曠野の中を彷徨きたいの、或は製造場へ行つて職工間に社會主義を宣傳したいの、又は手工を覺えたいの、繪畫を習ひたいの、音樂をやりたいのと、種々な事をいふ。こんな事が自分に必要だと固く信じて、一々明白に其理由を述べ、若し反對でもしよものなら、熱して殆ど狂せんとする。而して自分の之を希望する動機は主として自衛に在ると曰ふ。

「人間として何も爲ずに死んで了ふのは、餘り馬鹿々々しいからね、動物でも何かしら爲る、況や僕は人間だもの、何か爲なきや」と能く此様な事をいふ。それで哲學者と譯名を呼ばれるけれど、其癖自分の意見、行爲、希望に辻褃の合つた理由を付け得た例がない。いつも獨斷的に簡短な格言めいたことを言つて済まして置くので、皆此人の事を大言家だといふ。もう珍らしくもないので、關ひ付け手もない。リヤホフは教育のある聰明な男で、其奉職する物産稅務局でも相應に幅の利く官吏であるが、此人ばかりはクラフツォフが最負で、彼れ決して馬鹿ではないが、唯惜むべし、足の踏處があやふやで、才が志に副はぬと評してゐる。ヤロスラーフツェフは此人には目を呉れぬ連中の一人で、遣ふことは有つても、研究したことが無いから、其人と爲りを知らぬ、唯皆が精神に異状のある男だといふから、其説に雷同して、大方然うだらうと思つてゐた。

が、今となつて見ると、このクラフツォフが急に堪らなく面白い。五日程前に一緒

に舟遊をやつた。其時話をした所では格別異つた所もなく、反ていつもより沈着いてる位であつた。然るに今や其人が狂人になつたと云ふ。狂人になつたと云ふけれど、彼時舟では自分の臂を把つて、例の激越の調子で盛に論じた。論旨は、デモニイズムだの、シンボリズムだのといふ病的思想は、常規を逸した點はあるが、物質主義の弘布に對する必至の反抗で、物質主義は早晚識者の眼中其信用を墜すに違ひないといふに在つて、義理も明晰で聽くべき價値があつた。と思ふと、クラフツォフが金切り聲を振絞つて言つた次の文句が又しても想出される。

「今の思想界の惑亂の原因は全く理想主義の衰微に在る。此世からロマンチズムを追出した連中は人間を裸體にしてつたので、爲に人間同志の關係は無味枯淡になつて、お互に愛相が盡きて了つた。まだく吾々の精神は固まらん、かるが故に眞實を暴露られると、害を受ける。飾氣のない眞理は常に人間に利がないのみならず、反て害になるかも知れん。」

が、狂人になつてからは、如何なことを言つてゐるか知らず。一體狂人といふものは如何いふのだらう？

誰やらの説に、狂人とは一の心力の作用が他を壓倒した状態に外ならぬといふ。又誰やらの説には記性が一の事件又は思想に驚動せられた状態だといふ。

してみると、人心は終つ螺旋装置のやうなものだ。幾條かの螺旋が伸縮して、其處に運動を起し力を生ずると、思想が湧く、然るに忽然として一條の螺旋が他の螺旋よりも縮み過ぎでもすれば、全體に狂が生じて、新に調子づくか、又は舊の調子に復る迄は、それが止まぬ。或は何か重たい衝動を起すべきものが外から來つて其装置の中に入り、恰も過去の記録を掌る螺旋の上に墜下すると、其響きで其螺旋は新事實を録す能力を失ひ、始終同一の事を反復する結果、その呈する所の現象に變化がなくなる、といつたやうなものかと思はれる。

「極めて單純で、又極めて惑然なものだ。が、しかし、何の必要があつて人間が狂人な

(342)

んぞになるんだらう？ それでなくつてさへ病氣だの、災難だの、ウンと背負込んでるんだ」と考へて、ふと想出せば、「おお、さうだッけ、病人の介抱に行かなきゃならなかつた。」

が起ちも上らず、行きもせず、帽子を冠つて、外套を被て、椅子に掛つたまゝ、尙ほ考へ續ける。

「が、若し偶とクラフツオフが天才になつてたら？ 天才は狂氣だと云ふ。誰もまだ天才の出現する様子を語つたものはない。事に寄ると、氣が狂れると、同じ事だが觀念の奴になると、或は觀念を奴にすると言はうか……」

何遍か一ツの語を反駁して言つて見たかつたが、薄氣味悪かつたので、それは止した。語が種々の色彩を帯びた斑點のやうなものになつて、譬へば無際涯の空間にフワ／＼と散かつた雲か何ぞのやうに思はれる。其跡を追つて飛んで行き、捕へて之を額合せさせると、一條の紅霓が燦と棚引く、これ即ち思想だ。若し夫れ之を空

氣諸共吸込んでまた吐出すと、鏗然と鳴つて言句が成る。

「が、しかし單純なものだ」と心ゆくばかり笑つて、「デカダン派の連中は流石に鋭い。針のやうに先が尖つてる。だから深く神祕へ頭を突込むのだ」と指を弾いて得意になつて口走つた。

部屋の戸がギイと開いて、お神様が覗き込むで、

「まあ、外出の服装で、坐り込んで笑つたり、獨言をいつたり……大層お忙しうございますね。お茶を喫りますか？ それとも何處かへお出懸け？」

口は憎いが、目が優しい。金壺眼ても活氣があつて、額へ掛けて小皺が寄つてゐるので、いつも笑つてゐるやうだ。

お神様に斯う言はれると、ヤロスラーフツニフ甚く頽然して、今何處からか歸つて来たやうな心持になる。

「茶かね？ 茶は要らない！」と手眞似で茶を追拂らつて置いて、「これから出懸け

(343)

るのだが……事に寄ると、今晚は歸らんかも知れませんが。ねえ、お神さん、友人で狂人になつた者が有るんだが、如何いふ理由で狂人なんぞになるんだらう？」

「おやく、まあ、氣違ひに？ 此間はビストルで死んだ人が有つたのに、又狂人が出来るなんて、貴方のお友達は皆厄介な人ばかりね、如何いふ理由で狂人になるツて、それが皆神様の御都合ぢや有りませんか。」

「神様の御都合？」と考へく、何故だか帽子を脱つて、「妙だね……實に妙だ……全く！」

「誰方が狂人に成つたんですえ？ あの方ですか、あの、ほら、赤ちやけたジャンジャラ髪の毛の、鼠のツボンを穿いてる、あの方ですか？ それとも、あの面白い、金縁の鼻眼鏡を掛てる方ですか？」

とお神様が聞く。その小皺だらけの大きな面にも、聲にも、同情が一杯含まれてゐたので、ヤロスラーフツェフは急に何だか悲しくなつて來た。

「いや、違ふ。髪の毛の黒い、いつもトンビを着てステッキを持つてる、そら、能く眉毛を動かす、あの男です」と聲を落して眞になつて言つた。如何やら咽喉元が襟ぐつたいやうで涙が零れさうだ。

「ぢや、薩張り當りが附かない。滅多にお出でなさらない方なんでせう？ 何だかお目に懸つたことが無いやうだ。ぢや、まあ行つてらっしゃいませ——だが、餘り永居なさらない方が好うござんすよ。人の看病どころか、御自分のお顔を御覽なさい。色光澤の悪いこととつたら……」と突慳食にいふ。

で、ヤロスラーフツェフは又帽子を冠つて、起上つて、黙つて部屋を出たが、悲しさは胸に充ちて氣も萎えくとなつてゐた。

「錠を叩いて下さい」とお神様が後から喚いたが、

「いや、其儘で宜しい！」と悲しげに首を掉つた。

もう午後六時ごろであつたが、外はまだ中々の暑さで、往來の敷石も、家々の壁

(346)

も、カツ／＼と熟るやうで、雲の見えぬ空までが暑さうだ。垣越しに往來を覗く埃まぶれの植木の葉はそよるとも音せず、天地が寂と謔まり返つて、何事かの起るのを、今か／＼と堅津を呑むで待つてゝも居るやう。

とある白壁造りの家の開放した窓の中からピアノの音が聞えた。調子も整はぬ秩序のない音色で、それが頭の上を掠めて空を狂ひ行く。と、ヤロスラーフツェフは惚ツと震上つて立上り、きよろ／＼と四下を視廻した。この騒で何ぞ其處らに變つた事は起らぬかと視廻したやうな様子であつたが、往來は相變らず寂寞たるもので、其中にピアノの音は消える。聞えたのも無意味であつたが、聞えなくなつたのも無意味であつた。

「音響の命は短いものだなあ！」と唐突な事が頭の中に閃と浮んで直ぐ消えて了ふと、その反響でもあるかのやうに、アオエオアと、節廻しも俗曲めかして、高調のフルセットで、一番歌つてみたくて堪らないのが總身に染渡る。が、強ひて此念を

抑へて歩き出したが、之とは全く縁のない別の事が頭の中でごたく／＼するので、自然と頭垂れて、此紛々を足拍子に合せて一ツ／＼言葉にしてみようとする。と、言葉が腹の中で大太鼓でも叩くやうに鳴り渡る、しかし斯う足拍子に合せて考へつつ行くと、胸の中、腹の中、身體中全體がスツキリ透いたやうに爽快になつて、何となく筋肉が暑さに盪けて了つた跡に、弾力のある細かい神経ばかりが残り、其にしめやかな、哀れツほい、四下の物同様に、何かを待つてるやうな調子が附いたらしく思はれる。

ふとクラフツオフの事を想出して、「今頃は如何なことを饒舌つてるか知ら？ 如何いふ考へでゐるだらう？ が、待てよ、己は行つて如何したものだらう？ 大方言ふ事は理が分るまいから、側に附いてるのは無益な話だ。一體何で狂人の看護なんぞをする氣に成つたんだらう？ 好奇心かしら？ それとも同情かしら、或は唯義務と思つたばかりか知ら？ 氣違になりや死んだも同然だらうが、まだ全く氣違に

(347)

なり切らずに居たら、己は唯彼男の悶くの傍観するだけの事になる。妙なもんだな、人間といふ奴は達者で無難の時にや何でもないが死かゝると面白くなる。能くあるやつだて、生きてる中にや生きてることにも氣の附かない程詰らん奴でも、ふツと死んだとか、死にかゝつてるとか聞くと、可哀さうになつて其噂をする……死だり死にかゝつたりすると、人間と人間との間が接近するやうだな。此處に何でも深い意味があるに違ひない。でなきや、大偽善が潜んでるのだ、唯昔から慣れツこになつてるので、誰も氣が附かずに居るのだ。それとも何かしら、人の死ぬのを見てると、自分も何時か一度は死なゝきやならんことを想出して、それで他を慰れむは即ち自ら慰れむ所以といふ譯かしら？ してみると、こいつは狡猾の分子を含むでる、寧ろ卑劣だ。しかし人間界の事は總て狡猾で卑劣だからな……だから同情といふやつは残忍なものだ。慈悲にして且つ残忍か。やれ〜！ とはいふもの、全く同種の言葉なものな、意味から言やシノニムだもの。それを今迄皆が氣が附か

ずに居るとは驚く。こいつあ一番論文を書いてやらなきや、一廉でも間違ひの滅つた方が好い。」

此眞理を發見すると同時に、曾て田舎であつた事だが、それを憶出した。或時さる百姓の飼つてゐた牝の犢が坑へ落ちて、前脚を二本とも折つたことがあつた。殆ど村を擧つて見物に駈付けると、犢は哀れな風で坑の底に倒れ、悲鳴を擧げながら大きな目を濕ませて人々の面を視め、幾たびか起上らうとしては、幾たびか倒れる。その呻きつ悶きつするのを、村人は周圍に人垣を築き、慰むよりは興がつて見物してゐた。ヤロスラーフツェフは面白くも何ともなく、反つて悲しくてならなかつたが、矢張其中に交つて見物してゐると、忽ち鍛冶屋のマトウェイといふのが何處からともなく出て來た。雲衝くばかりの大男で、髪の毛が黒く、一癖あるべき面魂で、粉炭に汚れて眞黒になつてゐたが、見れば兩袖を捲き上げて片手に重さうな鐵の棒を提げてゐた。黒い目に倍と四邊の見物を睨廻した序に、ヤロスラーフツェフをも睨付け

て、肩を寄せるかと思ふと、首を一ツガククリさせて大喝した。

「馬鹿野郎めらが！ 何を見てけつかるだあ！」

で、提げてゐた鐵の棒を振翳して、やツと憤の脳天目掛けて打卸すと、冴えぬ、拍子の脱けた音がしたが、それでも頭蓋骨は割れた、無氣味な觀物であつた。憤は其なり吼止むで、もう大きな濕み眼に痛みを訴へなくなつた……と見て、マトウェイは悠々と其場を去つたツツけが、

「いや、彼奴の慈悲は又格別だ。人間でも、到底も治らない病人だつたら、彼奴の事なら矢張り如彼して丁ふかも知れん。それで一體道義に合ふものか知らな？」

「おい、ヤロスラーフツェフ！ 何處へ行く？」と誰やら甲走つた聲で呼ぶ者がある。

愕然として振り返つて見ると、ルイジンが隠袋へ兩手を衝込んで、小ぢんまりとした洒落た家の戸口に立つて、莞爾してゐる。其姿を見ると、始て此家にクラフツォ

フは住まつてるのだツツけと想出して、

「君の所へ……何さ、クラフツォフの所へ来たんだ。」

「さうか。そりや早速難有い！ 僕あ弱つてたんだ。仕事かウンとあるんだ。皆急ぎの仕事で、外出もせずに居たところを、半低音先生クラフツォフの哲理談にウンザリしたもんだから、無理に引張り出したらうぢやないか。病人は能く饒舌るよ！

今は寝てるるがね、醫者の診断では、今の處では格別心配な事はないさうだ。僕にも然う思はれる。そりや愚にも附かん事を饒舌るけれど、不斷と大した相違はない。唯非常にお饒舌りをするのは事實だ。ぢや、僕は最う歸るよ。リヤホフが多分來るだらうと思ふが、來たら然う言つて呉れ玉へ、醫者が來たつて、而して加里を服ませろつて、何を言つても加里で持切つてたツツて……ぢや、失敬する。」

と手を出す。ヤロスラーフツェフは其手を握つたまゝで急に放さず、小聲になつて、
「君、如何してクラフツォフは氣が違つたんだらう？」

「如何して？ さあ……何と言つたもんかな。今迄が一體頭の中で兎が跳ねてた方だらう？ 何か最後の刺戟を受けたに違ひないが、如何な刺戟を受けたのか、薩張り分らん。お、それから、水が飲みたいでッたら、窓に罎が載つかつてるから、彼の中の物を飲ませて呉れ玉へ。矢張り何か加里のやうな鎮痙劑ださうだ。ぢや、僕は歸る。失敬！」

と外套を腕へ掛けて出掛けさうにしたが、呼留めようかと思つてる中に、先から尤も歩きながらではあつたが、振反つて、何故か莞爾して、

「明日は多分手續が済む筈だから、入院が出来たらう。」
 で、も一度外套を持替へて、匆々と行つて了つた。

ヤロスラーフツエフは其後姿を見送つて考へた、さて如何したものだらう？ 直ぐと病人の室へ行つたものか、それとも眼が覺めたら大方何とか物を言ふだらうから、夫迄此處で待つてゐるものか？ いづれクラフツエフは眼を覺すが否、一ツ甲高

な叫聲を擧げて置いて、それから大聲で早口に、あばすれの女の賣子其處退けと、太鼓を叩くやうに饒舌り出すだらうと思ふ。

此様なことを考へつゝ、頸垂れて足を運んだ。何處へ行くのか自分にも分らぬ。急に薄氣味わるい程落着いて了つた。今迄の屈託がふと燃盡した跡に、目的もない沁りとした悲しみが残り、それが温灰となつて心を埋めて了つた形だ。

ふと藥臭い厭な匂に襲はれて我に反ると、小さな部屋の入口に立つてゐた。室内は手も附けられぬ程取散らしてある。まつ中央には椅子が數脚集まつて、不正な半圓を描いてゐる其前面に、粗末な小さな寢臺が据ゑてあつて、床には紙屑、書物、汚れた皿の碎片、赤い毛絲の襟巻、皮製の小鞆などが轉がつてゐる。藥瓶やら、喫剩しの出がらしの茶の入つたコップやらを載せた圓卓子を前に控へて、寢臺の上に安らかに足を踏伸ばして仰向けに臥てゐる者があるが、圓卓子の蔭になつて其頭が見えぬ。窓は二ツ、一ツは淺黄の帷を下し、今一ツの上には花瓶が二ツ三ツ載せて

あつて、其間から庭の野薔薇や明石屋やライラックがチラ／＼見える。

此等を一通りズツと見渡してから、ヤロスラーフツェフは足を爪立て、何を警戒するのか、右手の人差指を押立て、左手で拍子を取りながら、寢臺を目掛けて進み、圓卓子の處まで来ると、其卓子越しに屈むで、息氣を殺して、病人の顔を覗き込むだ。

此前見た時よりは甚く寝れてはゐるけれど、唯其だけで、要するに眠つてゐるのだから、安らかな面相だ。と見て、ヤロスラーフツェフは咄と息を吻いた。狂人になつたといふから、大方顔も人並でなく、ひつつり引曲つて滅茶々々になつてゐるだらうと思つてゐたら、然うでもなかつたので、甚く満足して、莞爾しながら圓卓子の脇を退いた。氣違になるといふ事が存外氣もない事なので、それを愉快に思ふ。が、偶と脇を向くと、誰だか壁から顔を出して覗いてゐるものがある。蒼褪めた顔で、眼を細くして厭にニヤ／＼と相好を崩し、堪らないのを強ひて我慢してゐる

やうに、顔中が揉め返してゐる。此顔の處で片手を舉げて人差指を押立て、ゐるのは、威嚇した形であるが、手附といひ、面相といひ、得意の色は溢るゝばかりで、加之も其が毒氣を含むでゐる。

何かは知らず、免れがたい因縁づくの一大事が目前に逼つたやうな氣がして、ヤロスラーフツェフは總身の血が一時に冷え、心臓が縮み、ウンザリして、元氣も何も挫けて了ひ、ソツと椅子へ腰を卸すと、左の脇腹が勃勃と膨れ上つて、其中で水の泡のやうなものがブスツ／＼と弾けるやうで、悪寒くなつて何ともいへず心持がわるい。例の壁は成るべく見ぬようにして又起上つたが、考へて見ると、此しかみツ面は何處でか見たことがある、どころか馴染も馴染、餘程深い馴染のある面相だと思ふと、慄然とする程厭だ。

「あゝ、一件ぢやないかしら……あの、萬事見徹だと言やアがつた？」

忽ち目の前に際涯も底も知れぬ洞穴がポカンと開いた。中は如法の闇で、何が何

だか薩張分らないが、薄氣味がわるい。ヤロスラーフツェフはヒヨイと窺くと、慄然として、タヂ／＼となつて、確り目を瞑つて了つたが、どうやら穴の中から見えぬ手が出て引込むやうで、かうして目を瞑つてゐたら、今にも落ちる、若し落ちたら百年目、何時まで経つても底へは届かず、魂は刻々に細つて、遂には消えて了はうと思はれる。

身震ひして、急いで眼を開いて見て、嘸と息をした。此處はクラフツェフの部屋で足の下は床だ。丈夫な床だ。足に力を入れてウンと踏むで見て、それは確かに分つた。かうなると、もう一遍背後の壁が見たい、堪らなく見たい……そつと腰を浮かせながら、振反つて見た。が、此時は壁の顔は唯哀れで、恟々しながら一心に何かを待つ色が眉宇の間に現はれて、其儘其處に居すくまつて了つた相好だ。尙ほ能く視ると、や、これは自分だ、自分の取越苦勞をした心配面だ！

「お、鏡に映つてるのか……然うか……」と氣が附いてみると、始めて合點が行

つた。白いタオルが被せてあつたのに隠れて、鏡の上部も左右の縁も見えず、下部の縁も幾つか陳べてある寫眞の蔭になつて、是も見えなかつたのに、部屋の壁に張つた紙も矢張白かつたので、それとは氣も附かずに、度肝を抜かれたのであつた。が、かう分つて見ても、鬱いだ氣が矢張霽れぬどころか、反て益々鬱ぐ。鏡に映る我姿に視入つて凝と考へ込むだ。

「や、かういふ己が狂人になるのぢやないか?!」

ふと斯う思ふと、ハツとして、戦々と慄ひ出して、身體中が岑々と疼く。容の黴臭い濕氣などが一時に筋肉に浸込むだら、斯うもあらうかと思はれる。聲を立て、救を呼ばうかと思つた。何だか足が地を離れて、熱して大氣の中を行方も知らず落ちて行くやうな心持だ。胸が堪らなく痛い。両手で胸を壓へて、力を極めて擦り出したが、頭の中では恐怖の一念が荒れに荒れて打壊しを初める、其隙を狙つて思想や記憶の得體の分らぬ斷片がクル／＼と舞ひ出して、何の事はない、旋風が起つた

騒ぎだ。何でも脳中にありとある物が扯裂れ、破壊されて、満足な物は一つもなく皆只た一つの敵に追まわられて散々になつて了つたので、今は恐怖心のみが獨り腦中で猛威を震つてゐるといふ有様だ。ヤロスラーフツェフは口を開いて、太い息をして、更めて室内の悪臭い空気を十分に吸溜め、胸を張つてあはや聲を立てようとすると、

「馬鹿野郎！ 二夕目と見られた面ぢやない！」と怒鳴る者がある。如何にも輕蔑した音調で斯う怒鳴つてから、跡を續けて「態々其様な面相をせんでも、貴様が全體自然のしかみツ面といふ人間ぢやないか？ 探偵野郎め！ 此様な胸ツ糞の悪いことはない！ ベツ〜！……」

狼狽て振反つて見ると、クラフツェフが枕に肘を杖いて、両手で顎をおさへ、寢臺から此方を視てゐた。焔衝を起してゐると見えて、眼中が異しく光り、あくどい嘲笑の色を一杯浮べてゐる。それに髭は氣味悪く躍る、眉は次第に釣上つて帚のやう

に逆立つて頭の髪に逼る、唇は振曲つて苦笑を浮べ鼻の孔はひこつき、顔中が間斷なく揉めて、其處此處に皺の浪が寄る、といふもので、どうしても満足の人間の面でない、無氣味な相好だ。

「これだ、これが狂人だ！」とヤロスラーフツェフは思ふ。と、この新規な考に消壓されて、今迄氣を痛めてゐた事が跡方もなくなる。

フウと外へ太い息を吐いた。今迄は血の通の止まる程怖ろしくて、夫にばかり氣を取られてゐたのが、それが急にケロリとなる。クラフツェフの相好の崩れた面を見てゐると、何とも言へず愉快だ。之を視れば視る程、自分の正氣なことが明かになつて、氣が安まる。

「これが狂人といふものだ！」と腹の中で歡呼の聲を擧げて、「此様な面は滅多にない。昔し或る聖者が惡魔の洗面器に居る所を取捉まへて、十字を切つて其中へ封じ込めて了つたといふ話がある。此様な面をしてゐるのは、まあ、その惡魔位のもの

だ……

此比較で我ながら又一段と人格が上つた。斯うなると、深く自ら恃む所が出来て自讃しつゝ、直ぐと又斯う思ひ續けた。

「こいつあ動かん所だらう？ 此様に遠く昔に遡つて、形容の材料を拾つて来るなんぞは、精神に異状が有つては、到底も出来ん業だ。」

クラフツォフは燃ゆるやうな眼をヤロスラーフツェフの面から離さず、此間も終始口に悪罵を絶たなかつた。

「こら、探偵野郎、己の言ふ事を聴けッ！」

ヤロスラーフツェフは椅子を寢臺の側へるざらせて、愉快さうに莞爾して腰を掛け手を出して握手を求めながら、

「クラフツォフ君！ 如何したんだ？ 僕だよ！」

「さうよ、貴様よ。チャンと知てら、貴様は探偵で、己の考へてる事を探りに来た

のよ。ハッ、ハッ！ 其手は喰ふまい。如何して、己の考へてる事が一ツだつて分るもんか！ 己はな、今に人間を救ふから、何を皆が渴望してるか、己は知つてるチャンと知つてる！」

「クラフツォフ君！」とヤロスラーフツェフは嬉しさうに、優しく、諭すやうに「君は僕を覚えてゐるかね？」

「貴様を？ 覚えてゐるか？ 馬鹿言へ！ 貴様達は忘れたいつて忘れられる人間ぢやない。何處へ行たつて、貴様達の居ない處はないや……貴様達は蠅よ、油蟲よ、蠅よ、蚤よ、塵埃よ、壁石よ！」

命ぜられりや、如何なにも姿を變へて、何んにでも成らあ、而して種々な事を調べらあ……人間が何を、如何、何の目的で考へてるツて、一々調べらあ。しかし何と言つても貴様達は小弱さ！ 己は強大ぞ！ 大望の火を不斷胸に焚いてるからな。だから、今に己は、モーゼがイスラエルの子孫を埃及から導き出したやうに、

二 狂 人

人間を此世から導き出して見せる。此世は下水溜だ。その下水溜の中で息をして、貴様達は結構だと思つてるのだ。そこで己が導き出す、而して聖約の地へ行く。聖約の地といふのはな、空氣が清過ぎて、貴様達なんぞは生きてゐられん處だぞ。其處へ行つて、己がカステルの自由の泉の水を吾兄弟に飲ませて、彼等を鼓舞して創造的生涯に入らせる……大事業を成るのだ……一切の罪人を赦して人類を改造するのだ！ ところへ貴様達が埃及人の二の舞をやつて、跡を追蒐けて来る。而して貴様達自身の汚れの海に陥つて、溺れて滅びる。爾等は死を看出すべし、そは爾等自身に死を宿せばなりだ！」

「何を饒舌つてるんだらう？」とヤロスラーフツェフは思つた。クラフツェフが威張つて怒鳴るのを聞いてゐると、段々興が醒めて行く。相手の眼は爛々と鋭く煌いて、之を見ると、眞赤に焼けた針のやうな物で、顔や胸をチク／＼と刺されるやうな氣がする。

「う、！ さういや、能く古徳の遺書を読んでたツけ……何故だか知らんが……オーガスタインだの、オリジェンだの……ズラトウストも讀んだ筈だ……さうだ……何故彼様な本を讀んだんだらう？ 他に讀むものが無いぢやあるまいし……試してみると、矢張疾うから……一件だつたんだ……可笑しな男だ！ や、何か言つてる。おや！」と急に莞爾となつて、「己を探偵だなんぞと言つてる。さうすると、こいつあ追跡狂だわい！ あ、自分の事をモーゼだとよ——へ、え、誇大狂だな！ どうも造作もなく分つ了ふ。學術々々！ 大したものだ！ 何でも松明で照すが如くに分つ了ふ。しかし、氣の毒なものだ。」

又自分の正氣な事を自覺して、溶けさうに嬉しくなるにつけ、クラフツェフが可哀さうで、何だか泣きたいやうな氣持もする。

が、妙な事がある。何でもカウ心が暗い穴のやうな處へ引入られて、地平線も何も見えなくなるやうな氣がするかと思ふと、忽ち又ふらく／＼と高く騰つて、茫茫

二 狂 人

たる空間を思ふ様占領したやうな氣になる。或は又草臥れたやうで、遲疑してゐるかと思ふと、忽ち其處らの何やら角やらに牴觸り散らして、急奔して何かに就き更に又何處かへトンと落ちて其儘消えて了ふやうな氣がする。と、心臓が激しく鼓動するが、唯其だけの事で、其他には何の異もない。

ふとクラフツオフが蛇のやうに身を蜿らせて、寢臺の上に起直つた。襯衣一枚で、胸も露はに、亢奮して薄氣味悪い程居丈高になつて、

「しツかり聴いとれ！　そこで、己が野へ出で皆を呼集める。精神上では我儕は乞食だ、その乞食が皆野に集つて、悄然と此世を捨てるけれども早まつて喜ぶまいぞ！　貴様に限らん、誰でも若し我儕が敗北したつて喜んだら間違ふ。如何にも我儕は信仰の甲冑を戰場に棄て、破れたる希望の楯を手に持つて、此世を退參するのであるから、敢て敗北したのではないとは言はん。けれども、今に見よ、有晴れ創造の力量を具へて、自信の堅甲を擲いて歸つて來るから。凡そ自信ほど堅牢な武

器はないぞ！　宜いか？　而して我儕は幸福を空想して、其空想の清新な美花を身に纏ふのだ、だから貴様も邪魔をしないで、己に此の大功を樹てさせろ！　其の代り己が此の世に歸つて來ると、第一番に貴様の罪を赦す、而して貴様の腐つた心へ再造の息氣を吹込んでやる。やい、壁石！　邪魔するなツ！」

「誰を再造して救ふ積りなんだらう？」とヤロスラーフツエフの頭の中で、此様な事がふらつく。

狂人の饒舌るのを聴いてゐる中に、又可哀さうとも何とも思はなくなつた、どころか、少し忌々しくなつて來た。不斷に大袈裟な事を饒舌り立てるので、其聲が頭へ響いて、其處には一大事が起つてゐるのだが、其始末が出來ぬ。それは斯ういふ譯で、今しがた偶とした拍子で頭の中の物に種々の色が附いた、と明かに感ずるばかりでなく、それが眼に見えて、現に眼の前を黄、青、赤色の圓い球が、ふはくと飛んだり、ひらくと輪を舞つたりしてゐる。球の数は夥しいもので、皆水車の

如く廻轉するその中を、一ツ明るい青色の何か意味の有りけな球が、屢々脱け出ようとして脱け出しかねてゐる。是は何でも信仰に關係のある球に相違ない。が、クラフツォフの聲が空気を震動させるので、其處等の物まで皆躍つて混亂になつて、何が何だか分らなくなる。

「チヨツ、大きな聲を出しやがるなあ！」と使ひない聲を一人で擧げて、「何を如何しようツていふんだらう？ 本當に狂人ツて仕様のないもんだ！ 此世を捨てるツて如何するんだ！」

偶とさる繪を想出した。笛を口へ當てゝゐる人物の繪で、一人の男が川縁に立つて笛を吹すさんでゐると、四方から尋常の鼠や鼯鼠が寄つて來る所を描いたものだが、クラフツォフが其笛を吹いてゐる人に何處か似てゐる。こいつは可笑しいと、ヤロスラーフツェフは急に椅子の上で身を揉むで笑ひ出した。

すると、クラフツォフは反りかへつて背後の壁に突れ、頭垂れて黙つて了つたが、

聽て額越しに睨めて、大聲に、

「ユダが勝鬨を擧げてやアがる！……」

ユダは恟りツとして、クラフツォフの面を凝と視詰めた。で、一方は佛頂面で胡亂さうな眼色、一方は如何なる事かと膽を冷した眼色で、永い間黙つて互にヂロ／＼面を視合つてゐるが、相手の異しく光る眼に惹附けられるやうな氣がして、ヤロスラーフツェフは遂に椅子ながら身を屈めて、病人の足近く寢臺に肘を杖いて了つた。寂然となつた。戶外はもう薄暗く、庭の植込の影が朦朧と窓玻璃に射して窓基を這つてゐる。聽てクラフツォフが突然にニヤリとして、低聲で、

「僕は君を知つてるよ。」

「そりや其筈だ」とヤロスラーフツェフも首肯いて、窃と呶ぐやうに、「矢張り話をしめて呉れ玉へ。さうでない、何だか如何も怖ろしいやうだ……もう夜になるからね。」

「話をしてゐる？ 君と？ だつて、僕あ君を知つてゐるよ。君はヤロスラーフツエフ君だらう——統計家の？ 如何だ極りが悪るいか？」

「極りは悪くはないが、氣味が悪い。」

「さう、そりや然うだらう、氣味が悪い筈だ。未來は恐るべきものだからね。未來には君の一生のメ高が出て来る。」

双方とも最う私語と、一語は一語より聲低に言はうとする。部屋の内は薄暗かつたが、クラフツォフの嘲ける如き笑を浮べた面はまだ能く見える。益々引附けられるやうに感じて、ヤロスラーフツエフは一寸口を噤むだが、

「メ高が？ メ高とは？」

「メ高とは君が一生中に演じた醜態の總計だ。この計算には決して依怙の沙汰はないよと、小聲ながら押付けるやうに力を込めて、「君は君の行つてゐる統計以外に何も無いと思つてゐるだらう？ ね、然うだらう？ ところが、さうでないよ、さう思ふ

と、大きに的が違ふ。普通の統計の外に、良心の統計といふものがある。その統計は僕の管轄だ。僕は決して容赦せん……事實の貴重なことは能く心得てる。僕は最う君のメ高を出しツ了つたぞ！」

「さう人を威かすもんぢやない！」とヤロスラーフツエフが歎願するやうに言ふ。

「人を威かしちや不好が、探偵は須らく威かすべしだ。何故君は探偵なんぞに爲つた？ 何故僕の考へてる事を調べに来た？ 僕は唯考へてるばかりだよ。考へて害があるなら、僕一人其害を受けるばかりだ。外の者に迷惑は及ばん。考へるといふ事は特志がなきや出来ん事だ。何故なら、人間は考へると自滅する。他人は其人を殺すに、一文だつて金を遣ふ必要はない。」

此處まで言ふと、クラフツォフの囁く聲は急に斷絶れて、破鐘のやうな大聲になつて、

「お、金といや、然うだ……君は金にさへなつたら、僕の考へる自由を束縛せん

(370)

か？ 賄賂を取るか？ 幾何なら承知する？」

「こらッ！」とヤロスラーフツエフは矢張り小聲で、儼然となつて、「大きな聲を出すな！ 聞える！ いつも聞く耳は近所にあるものだ。」

「聞える？……貴様も矢張り人に聴かれるのが可怖いか？ 何故大聲を出しちや不好？ 貴様は敗徳漢だらう？ 貴様に物を言ふに大きな聲だつて關はん筈だ。な、然うだらう？ だから、邪魔をせずに己の行きたい處へ遣つて呉れ。己が行つて爲ようと、いふ事は、有益な事だけれど、平凡な事だ。決して法律に觸れるやうな事ぢやないから夫だけは安心してゐて呉れ。己が此世から導き出したいと思ふ人達は、そりや銘々缺點が有もしやう——有りもしやうが、此世の中に生きてゐる人間中では、一番出來の好い人達なんだ。それを貴様達は迫害するし、當人達も孤立で心細くてならぬので、自滅しかけてゐるのだ。貴様なんぞは此世の腐敗した空氣を呼吸してゐても何とも思ふまいが、彼人達は殆ど窒息せんとしてゐるのだ。貴様は腐敗の空氣中

に栖息する動物よ。けれども彼人達は……あゝ己に救はせて呉れ！」と大聲に喚いた。

ヤロスラーフツエフは癪に觸つて堪らなくなつた。寢臺の前に衝と起つて、靜かに一語々々厭に句切つて、正面に相手の面へ向けて、

「喚くな！ 貴様はな……能く聴け、貴様はな、狂人だぞ！ 分つたか！ 貴様は氣が違つたのだぞ！ 救ふが聞いて呆れる！ 誰を救ふのだ？ 己を誰だと思ふ？ キリール、ヤロスラーフツエフだぞ！ 貴様は氣が違つたのだ！ 文句を言はずに臥ろ！ 分つたか？……と、こんなもんだ……」

と、又椅子に就いた。息氣を逸ませて、忙しなく目瞬をしてゐた。クラフツォフは頭を抱へて、右へ左へ激しく身體を揺ぶつてゐた。

又薄氣味悪い程寂然となる。月が出て、蒼白い光が窓から薄暗い息詰つた部屋の中へ射込み、床に痕を留める。

(371)

(372)

肝癢を破裂させてから、ヤロスラーフツェフは悄然となつて、どうでも来る筈のその一瞬間を畏るゝ念が刻々に募る。寂然として薄暗い中で、何やら神祕の事が無言の間に匆々と行はれて行く。何やら破壊が始まつた。

床に印した蒼白い月光の上へ、窓の花瓶の影が落ちて模様を染抜いたところは、如何やら羊皮紙へ險怪な形象文字を書き散らしたやうで、其文字を見れば人生の深奥な祕密は、果敢ない人智で到底も解くことの出来ぬ事を語つてゐるやうであつた。ヤロスラーフツェフは一目之を見ると、忽ち顔を背けて了つた。何やら胸に響く所がある。

「もう駄目だ！」と小聲でいつたが、何とも言へず心細い。

クラフツォフは面を舉げて、黙つて、八の字を寄せて視てゐた。すると、ヤロスラーフツェフは偶と泣き出して、その足を抱いた。確り抱緊めて、其間へ面を押込み、赤兒のやうに飲泣きしながら、

「僕は……怖ろしくてならん……」

「未來が……？」とクラフツォフが小聲で問うた其聲には、勝誇つた氣味もあつたが、常人はヤロスラーフツェフの上に屈みかゝつて、戦々慄へてゐた。

「初から一通り話して呉れ玉へ……願ひだ！」とヤロスラーフツェフが小聲でいふ。

「そらッ！ 一人降参したぞ！」とクラフツォフも矢張小聲で言つて相手の頭を我足から引放し、「幸先が好いぞ……勝利……手始めから勝利だ！……貴様悔い悔める氣か？ う？ ぢや、まあ、席に就け……此處へ來たが好い、一通り話してやらう。」

と、ヤロスラーフツェフが我足を抱へてゐる其手を放さうとしたが、放さない顔を舉げさせようとしてみたが、いッかな舉げない。しつかりしがみ付いて、泣きながら何やら口の中で言つてゐる。

據どころなく其儘にして置いて、兩手を寢臺に杖いて、相手の上に屈みかゝるやうにしなから、小聲ではあつたが、嚴かに説出した。

(373)

「貴様も知つて居るだらう、人間には生活の捕虜になつて居る者がなる。英雄にならうとして教師や統計官吏に爲つた者が即ち其れだ。さういふ人達でも曾ては生活と闘つた事もある。が、闘に負けて、生活に附帯する俗累といふやつ捕虜に爲つて了つたのだ……己は斯ういふ人達の事について言ふのだ。救ひたいといふのも此連中だ……よろしいか？　そこでもつてからに、此連中は自滅しかけて居る、と云つても畢竟迫害せられるからだ。皆が敵視する、彼等自身にしても、決して自分の味方ではない。其證據には方々に散在して、銘々懷疑に罹つたり、憂鬱に陥つたりして自滅しかけて居る……尤も勝手に歩くことも、饒舌することも考へることも出来んのも其一因にはなつて居るが。そこで、己は此人達を集めて、生活から導き出して、無人の野へ連れて行つてからに、彼等の爲に其處にソノ世界救濟番所といふものを建てようといふのだ。よろしいか？　救濟番所で、コンミュンでもフアランステリーでもないから、法律には觸れない。な、さうだらう？　而して己が一人で皆を統率し

て、己の知つて居る事を残らず傳授してやる。己は種々な事を知つて居る、己の知識は知識の對象となる物より多い、何故といへば、己はさういふ物を残らず集めた積數を知つて居る——これが己の知識だ……で、我儕が寄つて、銘々の體にある汗を砂原へ滴して其上へ幸福の建物一杯建て、繁昌の土地にして了ふのだ。其建物の中に衆を壓して巍然として獨り聳ゆるのが即ち世界救濟番所で、其天邊に玻璃製の蓋が伏せてある。其中で己が年百年中グルグル廻轉して、天から預かつた人間の番をして居るのだ。己は少しも假借せん代り、非常に公平にやる。公平の極致をチャンと心得てるからな。で、皆に一ツの義務を負担はせる——それは創造の義務だ。創造せよ蓋は汝は人なればなりといつて、己が皆に命令する。そりや屹度偉觀だぞ。で、太平の君子國を建てたところで、世の中の探偵や強者、愚かなる諸國の人民までも、残らず呼集めて宣告するのだ、「汝等は吾徒を追拂つたが、吾徒は反て汝等の爲に萬古不易の生活の手作つてやつたから、能く見て置いて此真似をしろ！」

吾徒灰から甦つた者は尙ほ進んで創造する、末代まで創造を止めぬ。これが吾徒の本分だ」と斯ういつてな。で、曾ては貧者であつた我儕が、曾ては富者であつた者共に、精神力や活力の富を頌ち與へて、其處を立退く。大勝利だ！……其時己は全世界に對して、かういふ宣告をしようと思ふ、「人よ、色ある衣を纏へ、夜は逝きぬ、再び來ることなからむ」さ。な己が迫害せられたり、虐待せられたり、昔く人間の艱苦を嘗め盡して思ひ付いたのは此事だ。だから、貴様も生きてなければ——新しいものを作り出せ！ 何でも好いから、何か人間に供へろ。人間は貧乏で哀れだ——貴様は己の手引で眞理と一致して了つたから好いけれどもな。貴様は己の第一の弟子だ——泣くなく！ 一所に創造をやらう。が、まだ貴様は筋骨が固まらん。矢張虐められて來たんだらう？ が、何も落膽することはないぞ。今に貴様も復活して新しい生活に入ることが出来る。新生活では吾徒も除物にはされん。何でも思ふ事を遠慮なく大聲で言へる。どうだ？ 己の言ふ事が信ぜられんか？ 信じ

ろく！ 何だか夢のやうな事を言つてるやうに思はれるだらうが、まあ信じろ。己は貴様にとつては善知識だ、未來の案内者だ！ 貴様が眞心から、智恵を絞つていふ事は決して徒にはならぬ。屹度人が其を聞留めて玩味して、眞意を解して呉れる、而して貴様は生活の爲に生活した人類の恩人といふ名譽を博して、貴様の苦勞は酬はれる。己が受合ふ、己は嘘は言はん、屹度吾徒は生活の滋味に飽いて、何處を壓しても満足の音が出るやうになるに違ひない。貴様、神學者グレゴリーがジュリアンを評した言葉を知つてるか？ ジュリアンは眞理に背き去つて信仰を迫害した奴等の粹を抜いて型にしたやうな男だと云つてる。ジュリアンは羅馬の皇帝だと皆思つてるから、貴様矢張然然う思つてるかも知れんが、其様な腐つた事實は信じるな。もう徽が生えてる。事實から想を抜取つて、事實は忘れつた。生命は未來に在る。未來は吾徒の物だ。過去には想ばかりで、人格が無い。己も貴様も人格だ。だから必要な想だけを取つて來て、それを階段にして、幸福の梯を攀ちて、遂に永久の福

社に達するのだ——ヤコブの夢に見た神の使者のやうにな。生活の建設者、精神の再造者といふ資格でもって、其處まで行くのだ。」

クラフツォフが勿體らしく滔々と囁やく言葉の海は次第に意味が稀薄になつて、果は唯音が似通ふばかりで繋がつた徒の言葉になつて了つた。眼を光らして、意氣軒昂に、屹と嚴そかに言ふのを聽けば、

「救ひだ……杭だ……棒杖だ……」

ヤロスラーフツェフは疾から面を擧げて、クラフツォフの足を抱いたまゝ、寢臺の前へ跪いてゐるが、演説を終る頃には、少し反身になつて、あからめもせず相手の面に視入り、ほとく感に堪へてゐた。

蒼白い月光は尙ほ床に在つて、矢張羊皮紙にも見紛へられたが、形象文字に似た花の影は恰好が變つて簡易な一體になり、唯色ばかりが舊よりも濃かつた。部屋はたゞ人語に満ちて、私語めく聲が高く低く漂ふ。蕭かな夜で、窓外には黒い影が多

い。

二人は相對して唯汝と我とあるのみ、其他の事には無頓着であつたから、黒頭巾を被つた女の面や、帽子のまゝの、髭むしやの男の面が、入り代り立ち代り部屋の内を覗き込み、戸の向うでも矢張り私語めく聲が聞えたが、それをば見向きもせず、クラフツォフは相變らず寢臺に両手をつき、相手の顔へ我顔を差寄せて、饒舌りにしやべる。その聲が殆ど明方まで絶えなかつたが、戸外が朝靄に白むころには、流石にへトくになつて、枕の上へドサリと倒れると、其儘死人のやうになつて了つた。

ヤロスラーフツェフは急に身を起して、恟々しながら背後を振向き、衝と病人の側へ寄つたが、折柄クワツと戸外が明るなつたので、狼狽て外套を脱いで、帷代りに窓へ掛け、又寢臺の側へ来て、窃と小聲で、

「さ、是で好い、もツと聞かせて呉れ玉へ。」

けれども、クラフツォフは最う口が利けなかつたのであらう、點頭たばかりで、溜

息すると、臥反り打て壁に對つて了つた。ヤロスラーフツェフは寢臺へ押上り、病人の足元に、両手で我膝を抱いて蹲まり、隨喜の眼を凝して、この世界救濟番所の建設者を目成つてゐた。

初は四角な白い枕の上に、黒い頭が判然見えてゐたのが、やがて朦朧し出して遂に見えなくなると、其跡が茫々と黄色な枯野になつて、死骸が數多横はつてゐる……位置は様々で、皆旅人の死骸——死骸が此處で休息してゐるのであつた。野の末を遙かに、血紅色の球が一ツ、燦然と何處かへ落ちて行き、近くは日が翳つて、草臥れた旅人が皆弱い影に包まれてゐる……やがて夜に入つて夢の世界になると、野中の寂寞を破つて、まろねの人の寢言が鳴り響動む……中に一人眠らぬ人があつて、數多夥伴の臥てる中に衝立ち估と空を睨まへてゐた。空には星が降る程あつて、其より下の中空に黒點が三ツ懸つて動かぬのが見えた。これは野に住む鷲で、彼旅人は猜疑の目を舉げて之を觀てゐるのであつた。

と見ると、浮世を遁れた人達が絡繹と街道を辿つて行く。中には泣く子を抱へた父親母親もあつたが、皆地厚な粗服を身に纏うて、埃に塗れて黙々として行く。その心中の愁苦は眼に顯はれて、艱難を経來つた心の傷は、譬へば其身に着けた破衣にも似た所があらう。先頭に進むは偉人クラフツォフで皆此人一人を便りにして、其節制に従つてゐる。自分はいつか其人と並んで行く、と思ふ中にもや／＼となつて、何も角も闇黒に隔てられて了つた。

と、又眼前に世界救濟番所の工事の景が開けて、それが闇黒に包まれる。と、又世を捨てた人が晴れて世に歸る盛んなところが見えて、それが又闇黒に包まれる。其後は最う何も見えぬ、縦も横もない如法の闇黒が身に逼り、心を責めて、冷たく悲しい。荒涼の氣の嘘く時には、身體動揺して定まらず、今一息で大地を離れて何處ともなく飛んで行きさうで、此様な時には我からは身動き一ツ恐ろしくて出来ぬ心細さ、怖ろしさは言ふばかりなく、而してぞく／＼する程寒い。

ちつと身を縮めて、眼ばかり一杯に睜き、闇黒の中から出て来べき或物を待つてゐた。其さへ出て来れば、自分の身が如何にかなつて、物凄いな今の境界を連れ出される。もう其が出て来る筈だ。今にも出て来る、もう一秒すれば……

朝日影を正面に面に受けて、悔りツとして目を閉ぢた、而して病める赤兒の爲るやうな、便りない微笑をニヤリと漏した。

其後ほつりと目を開けたが、矢張り身動もせず、永い間ほつねんとしてゐた……

七時ごろリヤ、ホフと半低音君とが金縁眼鏡の高慢な容貌の男と連立つて来た。此三人は一人づつ、窃と部屋へ入つたが、まだ玄關には怪しげな風體の者が幾人か來てゐる様子。

「どうだつた？ 亂暴しやしなかつたか？」とリヤホフがいふ。リヤホフは蒼い悲しさうな面をした背の高い男だ。

ヤロスラーフツニフは此人々が押込むと、寢臺を下りかけて、晴やかな笑顔をして皆の顔を見てゐたが、此時リヤホフの出した手を握つて、染々嬉しさうに、

「もう來たのか？……ちや、もう出懸ける時刻だね？」

「さうだ……」とばかりで、リヤホフは眠てゐるクラフツォフの面を凝と覗き込むだ。

「如何しませう、目を覺すまで待ちませうか？」と半低音君が眼鏡の人にいふ。

「いや、直ぐ馬車へ何しませう。こらく一寸手を貸して呉れ！」

と其人が手招をすると、白のアブロンを當た強健な男が二人入つて來た。

「此病人だ。密と釣出して呉れ！」

其時ヤロスラーフツニフは寢臺の側へ衝と寄つて、病人の枕上に其顔を隠すやうに立塞り、吃驚して皆の顔を見廻し、小聲ながら佯となつて、

「何處へ連れて行く？……連れて行くといふのはクラフツォフの事だらう？ 何處へ？」

(384)

「無論、例の處へさ」と半低音君がいふ。

「病院へです」と同時に醫者も言つて、眼鏡越しに凝とヤロスラーフツエフの面を視た。

ヤロスラーフツエフは何か強ひて憶ひ出さうとでもするやうに、強く額を摩つて、

「成程、病院へ……が、しかし、如何いふ理由で？ 貴下は誰方です？」と窃と醫者の腕に觸つた。

「私かな？ 私は瘋癲病院の醫者だが……」といひながらも始終ヤロスラーフツエフの舉止に注目する。

「ぢや、教育のある人だ」と腹の中で思つて、手を出して握手を求めながら、「始てお目に懸ります……ぢや、貴下も矢張此人の……」とクラフツォフを顧みて、「眼に随いてお行になるのですな？」

「歩いて行くのぢやない、馬車で來たんだよ」と半低音君が横から口を出して、胡

亂さうにヤロスラーフツエフを見廻す。

此方は手を掉つて、「無駄な事だ！ 皆歩いて行つた方が好い、クラフツォフは尙更の事だ。」

「だつて途中で暴れ出すと、困るぢやないか？」と半低音君が小聲ながら強く言ふと、

「如何して？」と吃驚する。

「何を言つてるんだよ、君は？……馬鹿な！ 君も矢張氣でも違つたンぢやないか？……」

「まあ、一寸」と醫者が抑へた。

ヤロスラーフツエフはハツとした。が、正かといひさうに莞爾して、其辭不安の目で三人を視廻した。視廻された方も其處に衝立つて不審がつた危険さうな面で、矢張相手の面をデロ／＼視てゐた。視てゐると、ヤロスラーフツエフは何か心に紛雜

(385)

が起つた様子で、赤くなり蒼くなりしてゐる中に、いつか目に浮べた微笑も引込んで了ふ。と、兩眼が妙に大きく開いて、忽ちクワツと華やいだ。

「諸君！」と手を握り合はせて指の骨を鳴らしながら、歎願でもするやうな様子で、「諸君！如何したんです？君達にも似合はない。全く誤解だ！君達はクラフツ

オフを癡癡だといふんだらうが、それは誤解だ！然ういふ誤解は侮辱に等しい！

悪い事は言はんから、打遣つて措き玉へ。思ひ立つた事を行らせたが好い。實際クラフツオフの計畫は大事業であると同時に、目下の急務だ。君達は聞いて最う知つて

るでせう？それともまだ？如何して君達は然う亂暴だらう？……僕には……どう

うも君達の料簡が分らん！まあ、僕の言ふことを聴き玉へ。僕はクラフツオフを了解した。其趣意を諒とする。僕は非常識の人間ではない。それはバブキン君も知つ

てるだらうし、リヤホフ君も認めてをるでせう？ね？如何して諸君は然ういふ……

……實に、どうも、怪しからんではないか！それでは諸君の品位に係はる！ま、

クラフツオフの主意を味はつて見玉へ、實際吾人は腐敗して精神的に死につゝある、無分別に死につゝある、肉體的に俗悪に死につゝある。其原因はといへば、皆希望があつても、満足することが出来んからだ、孤獨寂寥の感に堪へんからだ、生活から除外されて活動が不足だからだ。ね、僕の言ふ事は間違つてはるまい？吾人は生活することを許されん。何故許さんのか？吾人は罪人でも何でもない。然るに此始末だから、それでクラフツオフは無人の沙漠へ移住して、暫く生活の範圍外に立たうと主張するので、道理ではないか？尤も吾人が精神的に復活したら、また世間へ連れて戻らうといふ趣意なので。ね、諸君！諸君はクラフツオフを如何する積だか知らんが、苟も他人の幸福を熱望する者、手を出して人を救はんとする者……苟も生活に苦しめられて、同類相噬む、哀れな人間を深く惑れんで熱心に愛する者は、諸君の眼中では皆狂人ではあるまいか？……」

ヤロスラーフツェフは息が詰つて、遂に沈黙して了つた。肝を潰したやうな面で、

二 狂 人

三人の面を視廻してゐる其眼から、大粒な涙がボタ／＼と零れて、唇がわな／＼と顫へてゐる。今にも聲を揚げて泣出しさうだ。

半低音君も口元を蠢めかせたが、

「ね、此通りです……傳染するから可怕い！ それを私は二晝夜も一所に居たんですからな……」

と醫者に囁く。

醫者は眼鏡を持揚げて鼻根の邊を一寸搔いたが、矢張事の奇なるに驚いた様子で、

「さやう……減多に無い事ですな！」

リヤホフは妙に苦笑して唇を噛みながら、皆の顔を視てゐた。皆黙つて了つた。ヤロスラーフツエフは頬に傳はる涙を拂つて、寢臺の側に萎けた面して、限りなき愁を眼に湛へ、部屋の中を視廻はしてゐたが、對ひ合つては三人の外に、白アブロンを當てた二人が立つてゐて、玄關先にはまだ二三人の面が戸越しに見える。皆黙つて

凝然と待つてゐる。皆此方ばかり視てゐるから、自分が注目の的となつてゐるのは明かなので、ヤロスラーフツエフは悲しげに微笑して、おづく、

「や、飛だ失敬を言つた！ 赦して呉れ玉へ！ 諸君は多數だから、道理は諸君に在る。僕は諸君の権利を否認するのぢやない……ぢや、僕は失敬しよう……別段用も無けりや……」

「ま一寸お待ち」と醫者が愛相よく止めると、

「然うですか？ ぢや、待ちませう」と素直に示された椅子に就いた。

クラフツォフが目を覺した。衝と起直つて、寢臺の上に坐り、可怕い面して部屋一杯に詰掛けた人々を睨廻し、大きな聲で、

「君達は何だ？」

「おい、クラフツォフ馬車で運動しようぢやないか？」とリヤホフが聞いてみた。

「嘘吐け、この古狸奴！ 貴様何か企らむでるな？……貴様なんぞの言ふ事が迂闊

二 狂 人

二 狂 人

信用出来るもんか！ 此處に居る中に一人だつて信用の出来る奴はねえ！……うゝ分つた！ 己を何處かへ連れて行かうツてんだな！……其手は食はねえ！ 強ひて引立つて行かうといふんなら、腕力で来い。貴様達のやうな塵埃みたやうな野郎は己が吹飛ばしつ了はあ！……連れて行かうたツて、さうはいかねえ！」

といふ頃には、最う長い囊のやうなものを頭からスポーツと被せられて了つた。中でジタバタしてゐる中に赤兒を襦袢で包むやうに包むで了つて、手車に載せて連れ出すのを、連れ出されまいと藻掻きながら、泣聲を振り立て、

「さうはいかねえ！……さうはいかねえ！……！」

リヤホフが跡に残つた。壁際へ寄つて、掛けてあつた何かの寫眞を外し、振反つて見ると、ヤロスラーフツエフが凄惨程一心に、何處ともなく部屋の一方を視詰めてゐる。

「ぢや、出懸けようぢやないか？」

二 狂 人

と優しくいふと、それでも素直に起つて、黙つて部屋を出たが、リヤホフが部屋の戸に錠を卸しながら、誰であつたか、側の婦人に、

「一時間したら歸つて来ます。」

といふと、ヤロスラーフツエフも直ぐ後から、

「一時間したら歸つて来ます。」

と反響のやうに同じ事を言つて、リヤホフの面を視て、キョトンとしてゐた。

* * * * *

二人とも今は病院に居る。クラフツォフは恢復の見込があるさうだが、お弟子の方は到底も駄目だといふ事だ。

運動の時、病院の庭で二人は顔を合せる。クラフツォフの髭の黒い、毎も亢奮した顔が見えると、ヤロスラーフツエフは遠方から小走りに駆け出して側に行き、帽子を脱りながな、そつと小聲で、

「先生、お話しして下さい！」

ヤロスラーフツエは滅多に物を言はぬ。言へば必ず小聲で遠慮がちに言ふ。クラフツエが歩いてゐる時は、此も後れまいとて飛び々々其眼に随いて歩くが、相手がベンチにでも腰を掛けてゐる時は、其足下に蹲踞つて、哀れな眼色で面を視上げながら、窃と歎願するやうに、

「先生、お話しして下さい！……」

で、「お話し」が始まる。先生のお話は、靈魂が迫害せられて煩悶する事を説く時には、慷慨激越で、世界救済番所の段は典重で、自分の事になると傲慢だ。自分は何だ？ 生活の闘に負けた人々の大導師——豫言者だ！

(明治四十年二月譯)

あひひゞき (ツルゲネーフ)

秋は九月中旬の事で、一日自分がさる榊林の中に坐つてゐたことが有つた。朝から小雨が降つて、その霽間にはをり／＼生暖な日景も射すといふ氣紛れな空合である。耐力の無い白雲が一面に空を蔽ふかとすれば、ふとまた彼處此處一寸雲切がして、その間から朗に晴れた蒼空が美しい利口さうな眼のやうに見える。自分は坐つて、四方を顧眄して、耳を傾けてゐると、つい頭の上で木の葉が微に戦いでゐるが、それを聞いたばかりでも時節は知れた。春のは面白さうに笑ひさゞめくやうで、夏のは柔しくそよ／＼として、生温い話聲のやうで、秋の末となると、おどおどした薄寒さうな音であるが、今はそれとは違つて、漸く聞取れるか聞取れぬ程の、睡むさうな、私語ぐやうな音である。力の無い風がそよ／＼と木末を吹いて通る。雨に濡れた林の中の光景が照ると曇るとで間断なく變つてゐるが、或時は其處に在

(395)

るほどの物が一時に微笑でもしたやうに燦爛となると、むら／＼と立た榊の細い幹がふと白絹のやうな柔しい光澤を帯びて、其處らに落散つた葉が急に斑に金色に光る、そこで頭の茸々したバアポロトニク類の美しい長い莖までが最う秋だけに熟え過ぎた葡萄のやうに色づいて、際限もなく纏れつ絡みつして目前に透いて見える、かと思ふとまた四邊一面に急に薄青くなつて、瞬く間に煌々した所が減くなつて了へば、榊の木立も光澤が失せて、宛然まだ冬の冷たい閃つく日光を受けぬ降りたての雪か何ぞのやうに白々となると——小雨が音のせぬやうに、忍んで、ばら／＼と降出す。榊の葉は著しく色は褪せてゐても、流石に尙ほ青かつたが、唯其處らに疎に見える稚木のみは總て赤くも黄ろくも色づいて、ふと日光が雨に濡れたばかりの細枝の繁みをちら／＼と漏れて來るときには、俄に目ばゆい程に光り出す。鳥は一羽も啼かず、皆何處にか隠れて静まり返つてゐるが、唯をり／＼人を弄るやうな四十雀の聲のみが鋼鐵の鈴でも鳴らす如うに聞える。此榊の林へ來る前に、高い白